

# 「ヤングケアラー」に関する実態調査 －アンケート調査結果報告書－

令和5年 12月

杉 並 区



## 目次

はじめに .....	1
I. 児童・生徒向けアンケート調査.....	3
1. 調査実施概要.....	3
2. 回答のあった全児童・生徒に関する情報.....	5
(1) 児童・生徒の内訳 .....	5
(2) 直近の生活状況.....	5
3. ヤングケアラーと思われる児童・生徒の実態.....	7
(1) ヤングケアラーと思われる児童・生徒の人数 .....	7
(2) お世話の内容 .....	8
(3) お世話をしている家族.....	9
(4) 家族構成.....	9
(5) お世話の頻度や時間.....	11
(6) 生活への影響 .....	14
4. ヤングケアラーに対する支援 .....	15
(1) お世話に関する相談.....	15
(2) 学校や周囲の大人に対する期待 .....	17
(3) 希望する相談窓口・場所 .....	18
(4) その他、悩みや気になること .....	19
5. 設問間（項目間）クロス集計 .....	20
(1) お世話をしている人の有無別にみた日常生活への影響.....	20
(2) 一緒にお世話をしている人の有無別にみた日常生活への影響.....	22
(3) お世話の頻度別にみたお世話の時間（平日） .....	23
(4) お世話の頻度別にみた日常生活への影響.....	23
(5) お世話の開始年齢別にみた相談相手 .....	25
(6) お世話の開始年齢別にみた相談したことがない理由 .....	26

II. 学校向けアンケート調査.....	27
1. 調査実施概要.....	27
2. 基本情報.....	28
(1) 学校の種類.....	28
(2) 回答者の役職.....	28
3. 支援が必要だと思われる子どもへの対応.....	29
(1) 校内で共有しているケース.....	29
(2) 学校以外の関係機関との連携.....	32
4. 校内におけるヤングケアラーの実態.....	33
(1) ヤングケアラーの把握.....	33
(2) ヤングケアラーの実態.....	34
(3) ヤングケアラーの把握や支援にあたっての課題.....	41
5. 今後のヤングケアラー支援拡充に向けて.....	43
(1) ヤングケアラーを支援するために必要なこと.....	43
(2) 学校におけるヤングケアラーへの対応等について.....	45
III. 高齢・障害関係の事業所向けアンケート調査.....	49
1. 調査実施概要.....	49
2. 基本情報（事業所・回答者）.....	50
(1) 所属している事業所.....	50
(2) 回答者の属性.....	51
3. ヤングケアラーと思われる子どもとの関り・支援の実績.....	52
(1) 「ヤングケアラー」に関する認識.....	52
(2) ヤングケアラーと思われる子どもの有無.....	53
(3) ヤングケアラーとの関り・支援の実績.....	54

4. 今後のヤングケアラー支援拡充に向けて .....	59
(1) 相談につながりにくい理由.....	59
(2) ヤングケアラーの支援のために今後必要なこと .....	61

巻末資料（調査票） .....	71
-----------------	----

児童・生徒向けアンケート調査票（小学校1～2年生用、小学校3年生～中学生用）  
学校向けアンケート調査票  
高齢・障害関係の事業所向けアンケート調査票



## はじめに

国による「ヤングケアラー」について全国調査の結果、本来大人が担うと想定されている、家事や家族の世話などを日常的に行っている 18 歳未満の「ヤングケアラー」と呼ばれる子どもたちが、潜在的にいたことが浮き彫りになった。

令和 2 年度に国が全国の中学 2 年生や高校 2 年生を対象として実施した調査（令和 2 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業「ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書」）によると、世話をしている家族が「いる」と回答したのは、中学 2 年生で約 17 人に 1 人（5.7%）、高校 2 年生で約 24 人に 1 人（4.1%）という結果であった。また、「ヤングケアラー」という言葉を聞いたことがない中高生は 8 割を超えるなど、まずは子どもに対する「ヤングケアラー」についての認知を広めるとともに、支援を必要としている子どもと、その家族に対する具体的な支援施策を検討することが求められている。

今後、杉並区においても、ヤングケアラーへの支援を強化していくにあたり、関係機関向けの研修の実施、ヤングケアラーに関する実態調査及び支援策の検討を行い、ヤングケアラーと思われる子どもを早期発見することや発見の感度の向上を目指し、支援につなげる仕組みづくりを進めているところである。

その一環として、下記 3 つの調査を実施し、ヤングケアラーに関する実態把握を行った。

1. 区立学校の児童・生徒を対象とする「ふだんの生活や家庭に関するアンケート」
2. 区立学校（管理者等）を対象とする「小・中学校におけるヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査」
3. 区内の高齢・障害関係の事業所を対象とする「ヤングケアラー支援に向けたアンケート調査」





# I. 児童・生徒向けアンケート調査

## 1. 調査実施概要

### ◆調査のねらい

- ・子どもの権利が守られていない可能性があるにもかかわらず、本人や家族、周りの大人が、ヤングケアラーであることを自覚や認識をせず、問題が表面化しない状況を改善するため、小学校1年生から中学校3年生までを調査対象とし、児童・生徒の学校や家庭での生活の中で抱える悩みや困り事などを把握することで、支援策の検討のための基礎資料とする。
- ・現在も子どもの権利が守られていない可能性がある児童・生徒が、本調査を通して誰かに相談したい気持ちをもった場合の支援策として、児童生徒用「アンケートの説明」に子ども家庭部相談窓口の「ゆうライン」等を紹介する。

### ◆調査対象

- ・杉並区立小・中学校の全児童・生徒（特別支援学校及び特別支援学級は含まない）。
- ・対象となる小学校と中学校は下記のとおり。

図表 1-1-1 調査対象の小・中学校

小学校 40校			中学校 23校		
1 杉並第一小	15 桃井第五小	29 和田小	1 高南中	15 高井戸中	
2 杉並第二小	16 四宮小	30 方南小	2 杉森中	16 向陽中	
3 杉並第三小	17 荻窪小	31 済美小	3 阿佐ヶ谷中	17 松ノ木中	
4 杉並第六小	18 井荻小	32 八成小	4 東田中	18 大宮中	
5 杉並第七小	19 沓掛小	33 三谷小	5 松溪中	19 泉南中	
6 杉並第九小	20 高井戸小	34 松ノ木小	6 天沼中	20 和田中	
7 杉並第十小	21 高井戸第二小	35 高井戸東小	7 東原中	21 西宮中	
8 西田小	22 高井戸第三小	36 久我山小	8 中瀬中	22 和泉中	
9 東田小	23 高井戸第四小	37 天沼小	9 井荻中	23 高円寺中	
10 馬橋小	24 松庵小	38 永福小	10 井草中	—	—
11 桃井第一小	25 浜田山小	39 新泉和泉小	11 荻窪中	—	—
12 桃井第二小	26 富士見丘小	40 高円寺小	12 神明中	—	—
13 桃井第三小	27 大宮小	—	13 宮前中	—	—
14 桃井第四小	28 堀之内小	—	14 富士見丘中	—	—

#### ◆回答方法

- ・児童・生徒1人1台専用タブレット端末を使用し、WEB アンケート票にアクセスして回答した。

##### 【小学1・2年生】

- ・アンケートを学校で実施（説明及び調査時間 15分程度）

##### 【小学3年生から中学校3年生まで】

アンケート調査票を全児童・生徒が回答する調査票①と家族の世話をしている児童・生徒のみ回答する調査票②に分けて実施した。

- ・アンケート①を学校で実施（説明及び調査時間 10分程度）
  - ・アンケート②を家庭等で実施（調査時間 20分程度） ※該当する児童・生徒のみ
- ・設問は、チェックボックスにて選択肢を選ぶ設問、数字や具体的な内容を入力する設問から構成した。

#### ◆調査期間

- ・令和5年9月1日～令和5年9月27日

## 2. 回答のあった全児童・生徒に関する情報

### (1) 児童・生徒の内訳

- ・ 杉並区立小・中学校の全児童・生徒の 81.5%にあたる 23,395 人から回答があった。うち、小学 1～2 年生が 6,627 人 (28.3%)、小学 3～6 年生が 11,670 人 (49.9%)、中学 1～3 年生が 5,098 人 (21.8%) だった。なお、中学 1 年生、2 年生、3 年生には、それぞれ小中一貫校の 7 年生、8 年生、10 年生が含まれている (以下、同様)。

図表 1-2-1 回答者の内訳

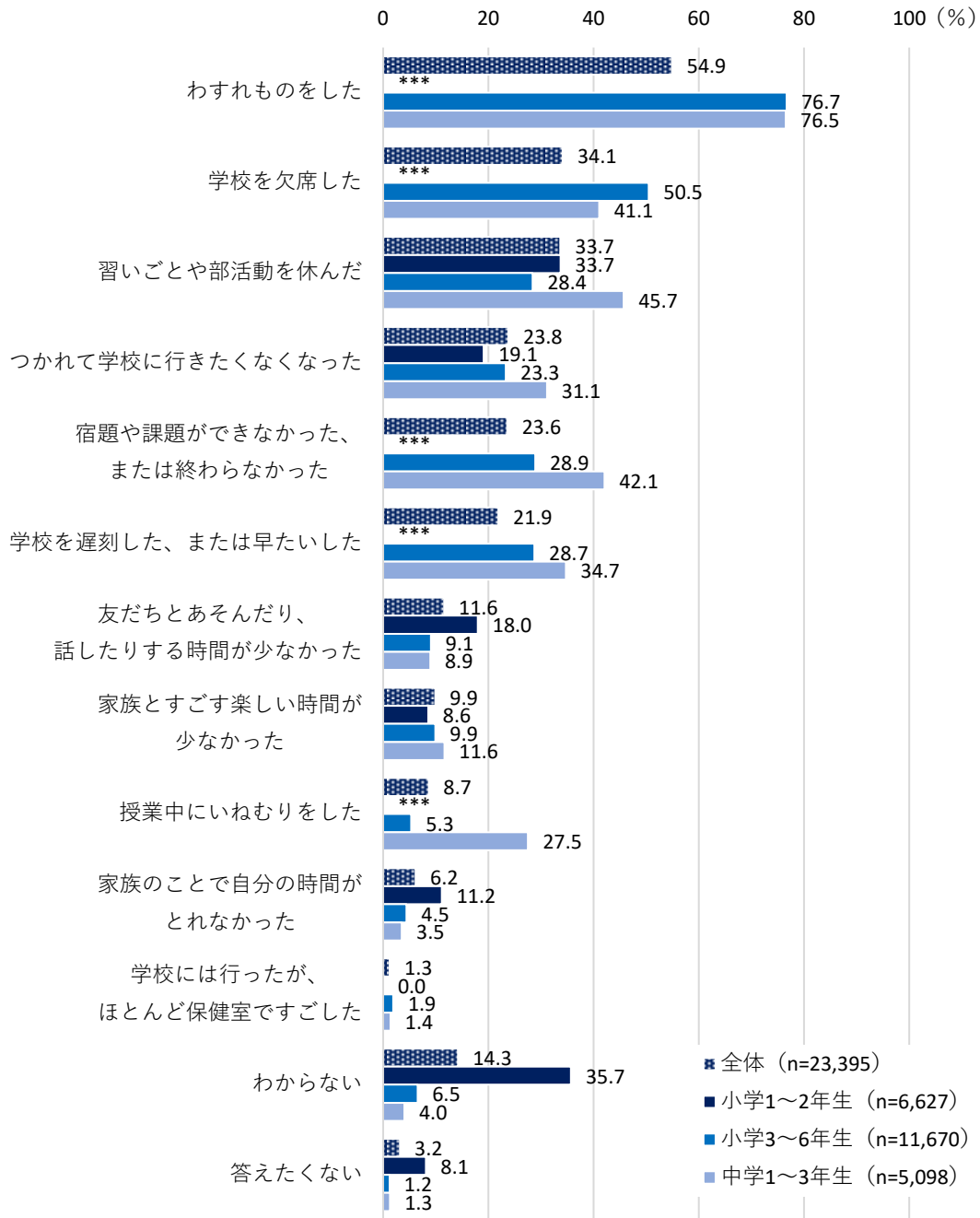
	回答数	構成比(%)	対象数	回収率(%)
小学1～2年生	6,627	28.3	7,560	87.7
小学3～6年生	11,670	49.9	14,436	80.8
中学1～3年生	5,098	21.8	6,710	76.0
合計	23,395	100.0	28,706	81.5

※対象となる児童・生徒数(対象数の合計)は令和5年9月1日時点

### (2) 直近の生活状況

- ・ 直近の生活状況について、小学 1～2 年生には夏休み期間中の生活状況、小学 3～6 年生と中学 1～3 年生については、4 月からアンケート回答時までの期間の生活状況を聞いた (小学 1～2 年生に対しては、項目を絞って質問したため、該当する回答が無いものもある)。
- ・ 全体では「わすれものをした」が 54.9%で最も多く、次いで「学校を欠席した」の 34.1%、「習いごとや部活動を休んだ」の 33.7%と続く。小学 1～2 年生では「習いごとや部活動を休んだ」が 33.7%で最も多い。小学 3～6 年生と中学 1～3 年生では、全体と同様に「わすれものをした」が最も多く、いずれも 4 分の 3 を占めている。

図表 1-2-2 直近の生活状況（複数回答）



※小学 1～2 年生の「\*\*\*」の表示は非該当の質問項目

### 3. ヤングケアラーと思われる児童・生徒の実態

#### (1) ヤングケアラーと思われる児童・生徒の人数

##### ① 家族内でお世話をしている人の有無

- ・小学3～6年生と中学1～3年生には、下記のとおりヤングケアラーの定義（お世話の内容）を調査票上で示した上で、あらためて家族の中にお世話をしている人がいるか聞いた。結果、全体では「いる」が16.6%、「いない」が83.4%であった。

図表 1-3-1 家族内でお世話をしている人の有無

	全体		小学3～6年生		中学1～3年生	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
いる	2,779	16.6	2,183	18.7	596	11.7
いない	13,989	83.4	9,487	81.3	4,502	88.3
合計	16,768	100.0	11,670	100.0	5,098	100.0

※「お世話(せわ)」とは、つぎのようなものです。

- 兄弟のお世話(せわ)や保育園(ほいくえん)などへの送(おく)り迎(むか)え
- ごはんを食べさせてあげる、ものをとってあげる、立ち上がる時などの手伝(てつだ)い
- 買いものや病院(びょういん)へ行くときなど、歩きやすいようにする手伝(てつだ)い
- 家族(かぞく)の話を聞いてあげる、元気づける、その人のそばにいてあげる
- あぶないことがないよう、いつも家族(かぞく)を見ていたり、声をかけたりする
- くすりを用意(ようい)したり、くすりを飲(の)んだか確(たし)かめたりする など

##### ② ヤングケアラーと思われる児童・生徒の学年

- ・上記①で「いる」と回答した児童・生徒（ヤングケアラーと思われる児童・生徒）は2,779人であった。そのうち、詳細を把握するための調査票②に進んだのは2,416人だった。学年の構成は下表のとおりである。

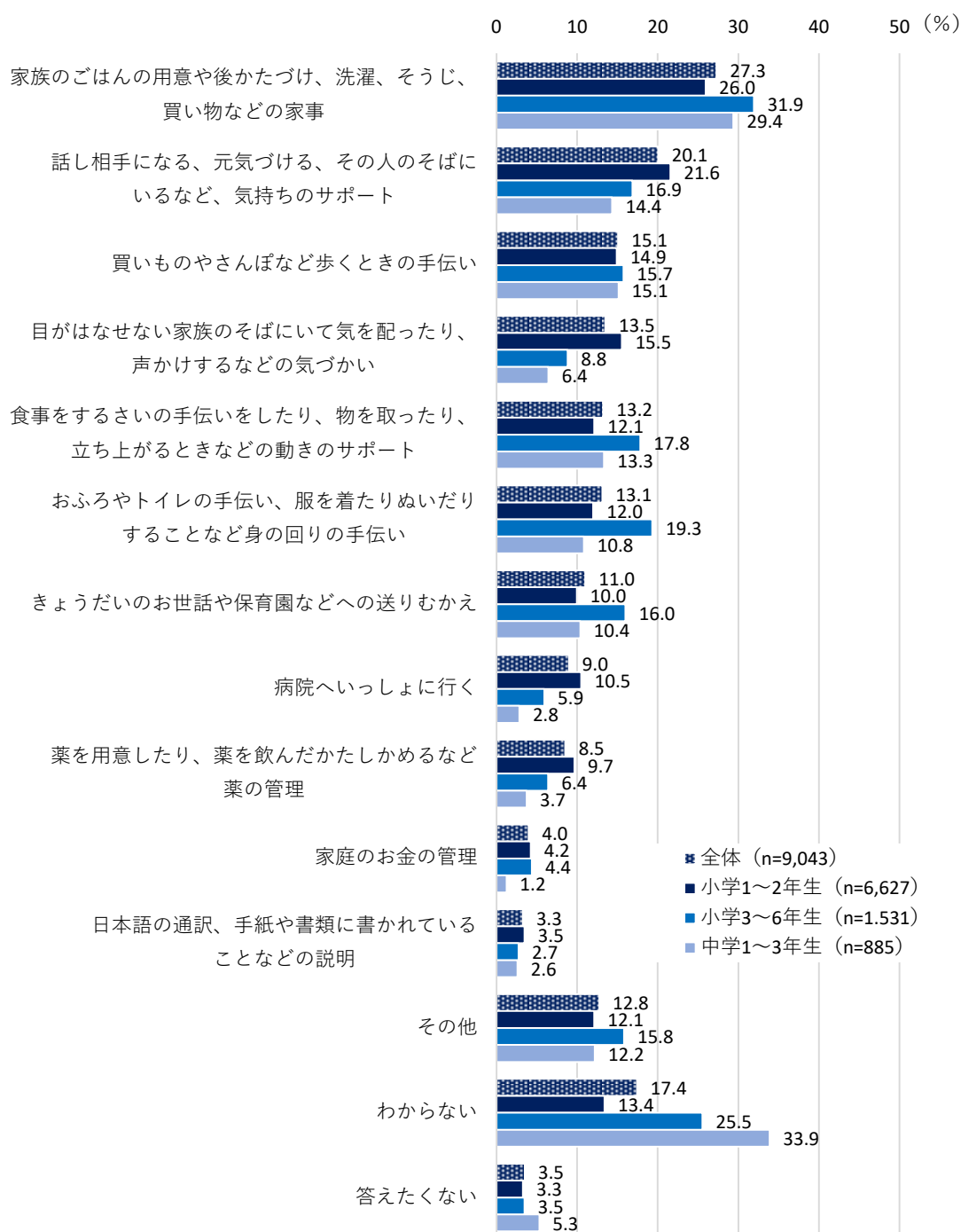
図表 1-3-2 ヤングケアラーと思われる児童・生徒の学年

	回答数	%
小学3年生	417	17.3
小学4年生	324	13.4
小学5年生	412	17.1
小学6年生	378	15.6
中学1年生(小中一貫校の7年生を含む)	192	7.9
中学2年生(小中一貫校の8年生を含む)	410	17.0
中学3年生(小中一貫校の9年生を含む)	283	11.7
合計	2,416	100.0

## (2) お世話の内容

- ・お世話の具体的な内容は、「家族のごはんの用意や後かたづけ、洗濯、そうじ、買い物などの家事」が全ての属性で最も多く、全体では27.3%、小学1～2年生では26.0%、小学3～6年生では31.9%、中学1～3年生では29.4%であった。2番目に多い項目として、全体と小学1～2年生では「話し相手になる、元気づける、その人のそばにいるなど、気持ちのサポート」であり、それぞれ20.1%と21.6%だった。

図表 1-3-3 お世話の内容（複数回答）



### (3) お世話をしている家族

- ・お世話をしている家族は、「きょうだい」が全ての属性でも最も多く、全体では42.8%、小学1～2年生では46.6%、小学3～6年生では40.6%、中学1～3年生では30.4%であった。次いで多かったのは、全ての属性において「お母さん」であり、全体では28.9%、小学1～2年生では36.1%、小学3～6年生では20.1%、中学1～3年生では13.2%であった。

図表 1-3-4 お世話の相手（複数回答）

	全体		小学1～2年生		小学3～6年生		中学1～3年生	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
お父さん	1,087	17.4	809	21.1	205	13.4	73	8.2
お母さん	1,809	28.9	1,385	36.1	307	20.1	117	13.2
おじいさん	399	6.4	338	8.8	44	2.9	17	1.9
おばあさん	552	8.8	447	11.6	74	4.8	31	3.5
きょうだい	2,679	42.8	1,788	46.6	622	40.6	269	30.4
その他	702	11.2	500	13.0	137	8.9	65	7.3
わからない	1,448	23.1	545	14.2	499	32.6	404	45.6
答えたくない	313	5.0	181	4.7	69	4.5	63	7.1
合計	6,256	100.0	3,840	100.0	1,531	100.0	885	100.0

※小学1～2年生対象のアンケートでは、上記「(2) お世話の内容」において、選択肢「家族のごはんの用意や後かたづけ、洗濯、そうじ、買い物などの家事」から選択肢「その他」までを選んだ児童が回答した。

### (4) 家族構成

- ・同居家族は下表のとおりである。「お母さん」が最も多く、次いで「お父さん」、きょうだい（「お兄さん」「お姉さん」「弟」「妹」）であった。

図表 1-3-5 一緒に住んでいる家族（複数回答）

	全体		小学3～6年生		中学1～3年生	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
お父さん	2,161	89.4	1,402	91.6	759	85.8
お母さん	2,348	97.2	1,486	97.1	862	97.4
おじいさん	157	6.5	101	6.6	56	6.3
おばあさん	256	10.6	162	10.6	94	10.6
その他の保護者	33	1.4	25	1.6	8	0.9
お兄さん	549	22.7	332	21.7	217	24.5
お姉さん	488	20.2	290	18.9	198	22.4
弟	703	29.1	443	28.9	260	29.4
妹	705	29.2	449	29.3	256	28.9
その他	58	2.4	34	2.2	24	2.7
わからない	9	0.4	3	0.2	6	0.7
答えない	15	0.6	8	0.5	7	0.8
合計	2,416	100.0	1,531	100.0	885	100.0

◆きょうだいの人数

・きょうだいの人数は、下表のとおりである。

図表 1-3-6 「お兄さん」の人数

	全体		小学3～6年生		中学1～3年生	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
1人	470	85.6	292	88.0	178	82.0
2人	58	10.6	30	9.0	28	12.9
3人以上	10	1.8	3	0.9	7	3.2
無回答	11	2.0	7	2.1	4	1.8
合計	549	100.0	332	100.0	217	100.0

図表 1-3-7 「お姉さん」の人数

	全体		小学3～6年生		中学1～3年生	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
1人	414	84.8	242	83.4	172	86.9
2人	53	10.9	31	10.7	22	11.1
3人以上	14	2.9	11	3.8	3	1.5
無回答	7	1.4	6	2.1	1	0.5
合計	488	100.0	290	100.0	198	100.0

図表 1-3-8 「弟」の人数

	全体		小学3～6年生		中学1～3年生	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
1人	593	84.4	374	84.4	219	84.2
2人	77	11.0	46	10.4	31	11.9
3人以上	28	4.0	18	4.1	10	3.8
無回答	5	0.7	5	1.1	0	0.0
合計	703	100.0	443	100.0	260	100.0

図表 1-3-9 「妹」の人数

	全体		小学3～6年生		中学1～3年生	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
1人	597	84.7	376	83.7	221	86.3
2人	72	10.2	43	9.6	29	11.3
3人以上	30	4.3	24	5.3	6	2.3
無回答	6	0.9	6	1.3	0	0.0
合計	705	100.0	449	100.0	256	100.0



## (5) お世話の頻度や時間

### ① お世話の協力者の有無

- ・ 家族へのお世話を一人またはだれかと一緒にするか聞いたところ、「だれかといっしょにすることが多い」が最も多く、小学3～6年生で24.7%、中学1～3年生で21.6%であった。なお、「いつも一人でしている」「ほとんど一人でしている」を合わせた割合は、小学3～6年生で18.2%、中学1～3年生で13.2%、全体でも16.4%であった。

図表 1-3-10 お世話の協力者の有無

	全体		小学3～6年生		中学1～3年生	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
いつも一人でしている	142	5.9	98	6.4	44	5.0
ほとんど一人でしている	254	10.5	181	11.8	73	8.2
半分くらいはだれかといっしょにしている	317	13.1	222	14.5	95	10.7
だれかといっしょにすることが多い	569	23.6	378	24.7	191	21.6
わからない	1,016	42.1	587	38.3	429	48.5
答えたくない	118	4.9	65	4.2	53	6.0
合計	2,416	100.0	1,531	100.0	885	100.0

### ② お世話の頻度

- ・ どれくらいお世話をしていると感じているか聞いたところ、小学3～6年生では「ほぼ毎日」が20.8%で最も多く、次いで「週に3～5日」の13.1%と続く。中学1～3年生では「ほぼ毎日」は12.1%であった。

図表 1-3-11 お世話の頻度

	全体		小学3～6年生		中学1～3年生	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
ほぼ毎日	426	17.6	319	20.8	107	12.1
週に3～5日	299	12.4	200	13.1	99	11.2
週に1～2日	269	11.1	176	11.5	93	10.5
もっと少ない	280	11.6	168	11.0	112	12.7
わからない	1,035	42.8	615	40.2	420	47.5
答えたくない	107	4.4	53	3.5	54	6.1
合計	2,416	100.0	1,531	100.0	885	100.0

### ③ 1日のお世話の時間

- ・平日（学校がある日）と休日（学校がない日）に、それぞれ何時間くらいお世話をしているか、「わかる」と回答した児童・生徒に平日と休日のお世話の時間を聞いた。

#### ◆平日（学校がある日）

- ・平日、お世話をしている時間は、平均 2.3 時間だった。分布をみると、全ての属性において「2 時間未満」が最も多く、全体で 47.8%、小学 3～6 年生で 49.7%、中学 1～3 年生で 40.0%であった。
- ・「6 時間時以上」という回答も、小学 3～6 年生で 11.3%、中学 1～3 年生で 14.3%みられた。

図表 1-3-12 平日 1 日のお世話の時間

	全体		小学3～6年生		中学1～3年生	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
2時間未満	89	47.8	75	49.7	14	40.0
2時間～4時間未満	53	28.5	41	27.2	12	34.3
4時間～6時間未満	10	5.4	8	5.3	2	5.7
6時間以上	22	11.8	17	11.3	5	14.3
無回答	12	6.5	10	6.6	2	5.7
合計	186	100.0	151	100.0	35	100.0

#### ◆休日（学校がない日）

- ・休日、お世話をしている時間は、平均 4.2 時間だった。分布をみると、小学 3～6 年生では「2 時間～4 時間未満」が 33.8%で最も多く、次いで「2 時間未満」の 27.2%と続く。中学 1～3 年生では「2 時間未満」が 28.6%で最も多く、次いで「2 時間～4 時間未満」の 22.9%と続く。
- ・「8 時間時以上」という回答も、小学 3～6 年生で 16.6%、中学 1～3 年生で 11.4%みられた。

図表 1-3-13 休日 1 日のお世話の時間

	全体		小学3～6年生		中学1～3年生	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
2時間未満	51	27.4	41	27.2	10	28.6
2時間～4時間未満	59	31.7	51	33.8	8	22.9
4時間～6時間未満	20	10.8	13	8.6	7	20.0
6時間～8時間未満	15	8.1	11	7.3	4	11.4
8時間以上	29	15.6	25	16.6	4	11.4
無回答	12	6.5	10	6.6	2	5.7
合計	186	100.0	151	100.0	35	100.0

#### ④ お世話の開始年齢

- ・ だいたい何歳くらいからお世話をしているか、「わかる」と回答した児童・生徒にお世話の開始年齢を聞いた。
- ・ お世話の開始年齢の平均は、7.5歳だった。分布をみると、小学3～6年生では「6～7歳」が38.2%と最も多く、約4割が小学校入学時くらいからお世話を開始している。中学1～3年生では「10歳以上」が63.4%で最も多く、約6割が小学校高学年くらいからお世話を開始している。

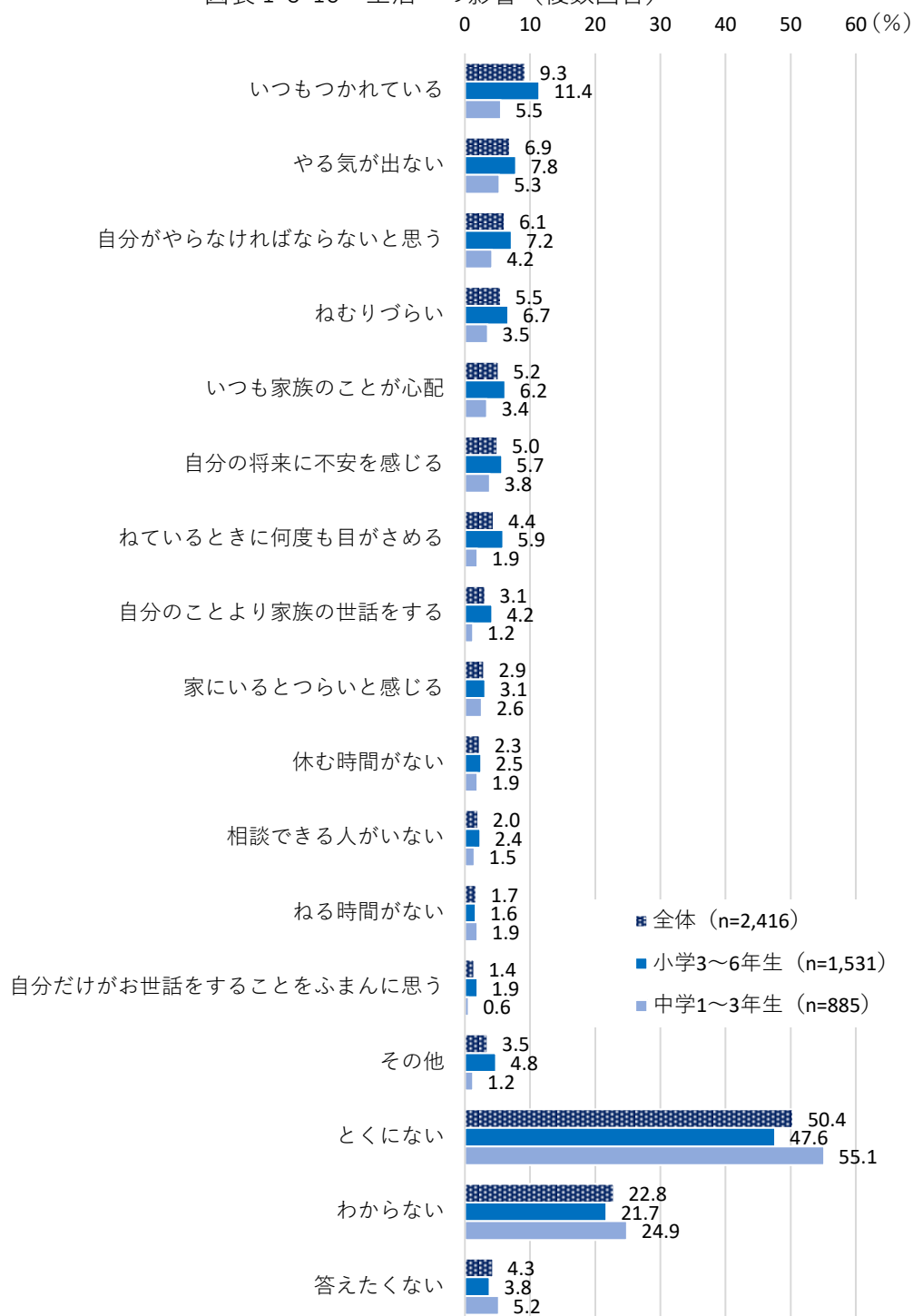
図表 1-3-14 お世話の開始年齢

	全体		小学3～6年生		中学1～3年生	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
6歳未満	137	23.0	120	26.5	17	12.0
6～7歳	192	32.3	173	38.2	19	13.4
8～9歳	121	20.3	105	23.2	16	11.3
10歳以上	145	24.4	55	12.1	90	63.4
無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合計	595	100.0	453	100.0	142	100.0

## (6) 生活への影響

- ・ 家族のお世話をすることによる生活への影響を聞いたところ、「とくにない」が5割程度となっているが、具体的な回答としては、全ての属性において「いつもつかれている」が最も多く、全体では9.3%、小学3～6年生では11.4%、中学1～3年生では5.5%であった。次いで「やる気が出ない」が続き、全体では6.9%、小学3～6年生では7.8%、中学1～3年生では5.3%となっている。

図表 1-3-15 生活への影響（複数回答）



## 4. ヤングケアラーに対する支援

### (1) お世話に関する相談

#### ① 相談相手

- ・お世話をしている家族のことやお世話の悩みについて誰かに相談したことがあるか聞いたところ、全ての属性において「お父さん、お母さん」が最も多く、全体では14.3%、小学3～6年生では18.0%、中学1～3年生では7.9%であった。次いで多いのは「友だち」で、全体では7.7%、小学3～6年生では8.9%、中学1～3年生では5.6%であった。
- ・なお、「だれにも相談したことがない」と回答したのは、小学3～6年生では26.4%、中学1～3年生では29.0%であった。

図表 1-4-1 相談相手（複数回答）

	全体		小学3～6年生		中学1～3年生	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
お父さん、お母さん	346	14.3	276	18.0	70	7.9
おじいさん、おばあさん	59	2.4	48	3.1	11	1.2
きょうだい	96	4.0	77	5.0	19	2.1
しんせき(おじ、おばなど)	24	1.0	19	1.2	5	0.6
友だち	187	7.7	137	8.9	50	5.6
学校の先生(保健室の先生以外)	42	1.7	32	2.1	10	1.1
保健室の先生	13	0.5	7	0.5	6	0.7
スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー	30	1.2	19	1.2	11	1.2
病院・医療・福祉サービスの人	7	0.3	4	0.3	3	0.3
近じよの人	11	0.5	11	0.7	0	0.0
LINEなどSNS上の知り合い	18	0.7	11	0.7	7	0.8
ゲームなどインターネット上の知り合い	12	0.5	9	0.6	3	0.3
自分と同じような経験をしている人	32	1.3	23	1.5	9	1.0
その他	103	4.3	68	4.4	35	4.0
だれにも相談したことがない	661	27.4	404	26.4	257	29.0
わからない	1,049	43.4	629	41.1	420	47.5
答えたくない	135	5.6	75	4.9	60	6.8
合計	2,416	100.0	1,531	100.0	885	100.0

#### ② 相談していない理由

- ・上記①で「だれにも相談したことがない」と回答した小学3～6年生404人、中学1～3年生257人に対し、その理由を聞いた。
- ・最も多いのが「相談するほどのなやみではないから」で、全体では58.7%、小学3～6年生では60.1%、中学1～3年生では56.4%であった。次いで多かったのが「理由は特にないが、相談しようと思わなかった」で、全体では20.9%、小学3～6年生では19.1%、中学1～3年生では23.7%であった。

図表 1-4-2 相談しない理由（複数回答）

	全体		小学3～6年生		中学1～3年生	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
相談するほどのなやみではないから	388	58.7	243	60.1	145	56.4
だれに相談するのがよいかわからないから	23	3.5	19	4.7	4	1.6
相談できる人がいないから	11	1.7	7	1.7	4	1.6
家族のことを話したくないから	16	2.4	9	2.2	7	2.7
相談しても何も変わらないから	24	3.6	17	4.2	7	2.7
その他	44	6.7	30	7.4	14	5.4
理由はとくにないが、相談しようと思わなかった	138	20.9	77	19.1	61	23.7
わからない	55	8.3	34	8.4	21	8.2
答えたくない	8	1.2	4	1.0	4	1.6
合計	661	100.0	404	100.0	257	100.0

### ③ 相談したい相手

- ・同様に、上記①で「だれにも相談したことがない」と回答した児童・生徒に対し、相談するとしたら誰に相談するか聞いたところ、全ての属性において「お父さん、お母さん」が最も多く、全体では 43.4%、小学 3～6 年生では 47.0%、中学 1～3 年生では 37.7%であった。次いで多かったのが「友だち」で、全体では 22.5%、小学 3～6 年生では 22.3%、中学 1～3 年生では 23.0%であった。
- ・他方、「だれにも相談したくない」という回答も、15%前後みられた。

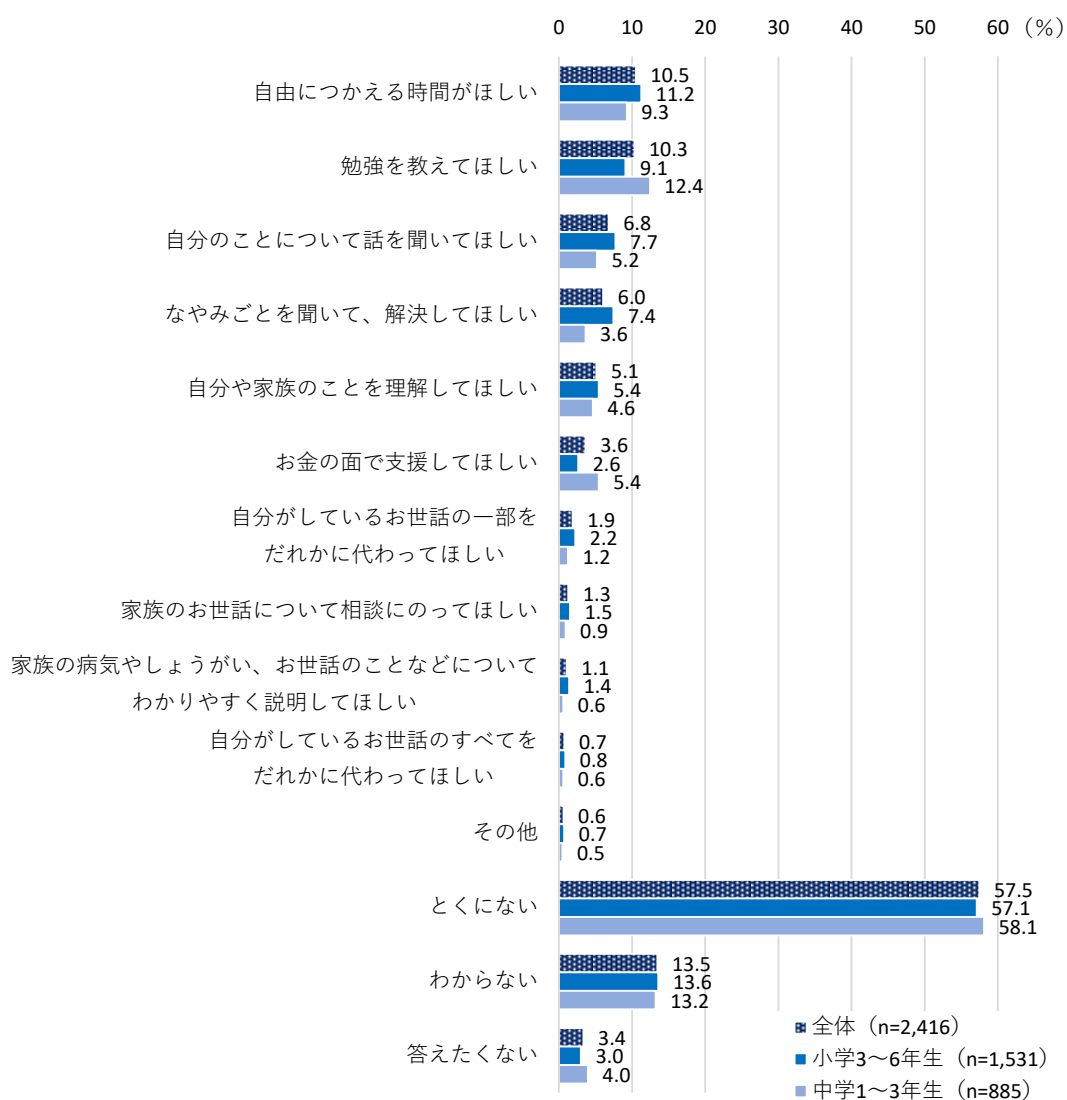
図表 1-4-3 相談したい相手（複数回答）

	全体		小学3～6年生		中学1～3年生	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
お父さん、お母さん	287	43.4	190	47.0	97	37.7
おじいさん、おばあさん	49	7.4	39	9.7	10	3.9
きょうだい	56	8.5	37	9.2	19	7.4
しんせき(おじ、おばなど)	22	3.3	16	4.0	6	2.3
友だち	149	22.5	90	22.3	59	23.0
学校の先生(保健室の先生以外)	29	4.4	21	5.2	8	3.1
保健室の先生	14	2.1	10	2.5	4	1.6
スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー	26	3.9	18	4.5	8	3.1
病院・医療・福祉サービスの人	7	1.1	2	0.5	5	1.9
近じよの人	4	0.6	3	0.7	1	0.4
LINEなどSNS上の知り合い	10	1.5	4	1.0	6	2.3
ゲームなどインターネット上の知り合い	14	2.1	4	1.0	10	3.9
自分と同じような経験をしている人	32	4.8	25	6.2	7	2.7
その他	18	2.7	11	2.7	7	2.7
だれにも相談したくない	99	15.0	57	14.1	42	16.3
わからない	111	16.8	59	14.6	52	20.2
答えたくない	11	1.7	7	1.7	4	1.6
合計	661	100.0	404	100.0	257	100.0

## (2) 学校や周囲の大人に対する期待

- ・学校や周りの大人にしてもらいたいことを聞いたところ、全ての属性において「とくはない」が6割を占めた。
- ・具体的な回答の中で多かったのは、小学3～6年生では「自由につかえる時間がほしい」の11.2%、中学1～3年生では「勉強を教えてほしい」の12.4%であった。

図表 1-4-4 学校や周囲の大人に期待すること（複数回答）



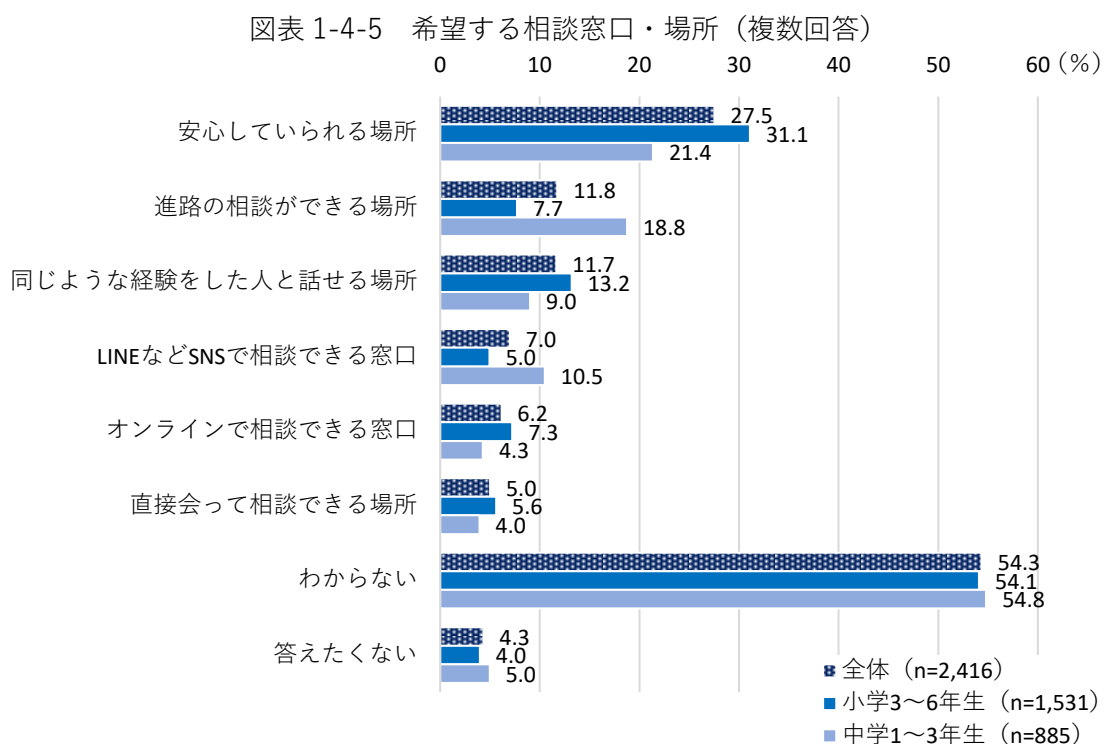
### 【「その他」の自由回答】

- 賢い人生の生き方についておしえてほしい。
- 何でも出来る時間が欲しい。私の事を聞いてくれてありがとうございました。
- ひまな時に遊んでほしい。なぜなら、楽しいから。
- 家族に対しての悩みをきいてほしい。
- 家族とあそぶ時間や話すことを増やしたい。
- 親に子供がストレスになるのはどんなことか、何を子供にしてはいけないのかを教えてほしい。
- いまのままでいい。
- 何もしてほしくない。

※自由回答については一部を紹介する。内容が重複している意見及び同様の意見は省略している。必ずしも原文のままではないが、なるべく回答者の表現を用いる形で記載している（以下同様）。

### (3) 希望する相談窓口・場所

- ・「あったらいいな」と思う相談窓口や場所について聞いたところ、全ての属性において「安心していられる場所」が最も多く、全体では 27.5%、小学 3～6 年生では 31.1%、中学 1～3 年生では 21.4%であった。
- ・次いで、2 番目に多いものとして、小学 3～6 年生では「同じような経験をした人と話せる場所」の 13.2%、中学 1～3 年生では「進路の相談ができる場所」の 18.8%であった。





#### (4) その他、悩みや気になること

- ・悩みや気になることを聞いたところ、下記のような事柄があげられた（自由回答）。

##### ● 自分の時間がほしい

- 自由な時間がほしい。
- 一人の時間が欲しい。
- 友達ともっと一緒に遊びたい。
- 家族と一緒にいる時間がいっぱいほしい。

##### ● 家族への気持ち

- 私は、妹の世話をしています。時々、妹にけがをさせてしまう時があります。その時私は悪くないのに、よくしかられます。もう私は、すごくつらい気持ちです。ですが、なかなか相談しづらいです。今でも悩んでいます。
- お母さんとおばちゃんが薬を飲んだか忘れる。
- 弟と一緒に歩いていたら、弟が人にぶつかって、その人が舌打ちしてくるので、舌打ちした人を殴りたくなった。弟みたいな障害を持っている人のことをみんなに教えてほしい。障害を持っている人たち全員にヘルプマークを届けてほしい。
- 妹が怒っているときなにをしたらいいかわからない。
- 目が離せない弟や妹がいる大変さを分かってほしい。

##### ● 学校や行政へ

- 自分のことは特にないが、自分が線維筋痛症の疑いがある症状が出始めて家族に沢山負担をかけていたとき、妹（当時小1）は相談できる場所がないうえに担任が理不尽なことばかりしてきていたので、自分の世話をかなりやってくれていたストレスもあってか学校に行くのがつらくなってしまっていた。
- みんなが幸せになるように生活を「いい生活をしている」か、確認してほしいです。
- 赤ちゃんや子供が住みやすい家庭環境をできたら築いてほしい。

## 5. 設問間（項目間）クロス集計

以下では、設問間（項目間）クロス集計を行った中で、特徴・傾向がみられた集計結果について掲載する。

### （1）お世話をしている人の有無別にみた日常生活への影響

#### ◆小学1～2年生対象

- ・お世話をしている人の有無別に夏休み期間中の日常生活への影響をみると、お世話をしている人が「いる」と回答した児童のほうが、お世話をしている人が「いない」と回答した児童よりも、全ての項目において該当すると回答した割合が高くなる。なかでも、最も差が大きいのは、「ゆっくりねむることができなかった」であり、「いる」が24.5%、「いない」が14.3%で、その差は10.2ポイントであった。

図表 1-5-1 お世話をしている人の有無 × 日常生活への影響

	全体		いる		いない	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
ならいごとを おやすみした	1,923	36.3	1,424	39.3	499	29.6
ゆっくり ねむることが できなかった	1,127	21.3	886	24.5	241	14.3
ともだちと あそぶじかんが なかった	1,055	19.9	811	22.4	244	14.5
じぶんの すきなことが できなかった	657	12.4	534	14.8	123	7.3
かぞくと たのしくすごす じかんが なかった	518	9.8	416	11.5	102	6.1
わからない	1,702	32.1	938	25.9	764	45.4
こたえたくない	380	7.2	253	7.0	127	7.5
合計	5,303	100.0	3,620	100.0	1,683	100.0

#### ◆小学3～6年生・中学1～3年生対象

- ・小学生・中学生ともに「わすれものをした」が最も多かった。
- ・お世話をしている人が「いる」と回答した児童・生徒のほうが、「いない」と回答した児童・生徒よりも割合が高く、その差が比較的大きいのは、小学3～6年生では「家族とすごす楽しい時間が少なかった」で、「いる」が15.7%、「いない」が8.6%で、その差は7.1ポイントであった。同様に中学生では、「宿題や課題ができなかった、または終わらなかつた」が最も多く、「いる」が51.2%、「いない」が40.8%で、その差は10.4ポイントであった。

図表 1-5-2 お世話をしている人の有無 × 学校生活などの状況

	全体		小学校3～6年生			
			いる		いない	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
わすれものをした	12,850	76.6	1,702	78.0	7,247	76.4
学校を欠席した	7,987	47.6	1,152	52.8	4,741	50.0
習いごとや部活動を休んだ	5,650	33.7	637	29.2	2,681	28.3
宿題や課題ができなかった、または終わらなかった	5,517	32.9	709	32.5	2,664	28.1
学校を遅刻した、または早たいした	5,126	30.6	665	30.5	2,690	28.4
つかれて学校に行きたくなくなった	4,308	25.7	584	26.8	2,137	22.5
授業中にいねわりをした	2,028	12.1	128	5.9	496	5.2
家族と過ごす楽しい時間が少なかった	1,748	10.4	343	15.7	812	8.6
友達とあそんだり、話したりする時間が少なかった	1,516	9.0	282	12.9	778	8.2
家族のことで自分の時間がとれなかった	700	4.2	185	8.5	335	3.5
学校には行ったが、ほとんど保健室で過ごした	296	1.8	67	3.1	158	1.7
わからない	970	5.8	98	4.5	666	7.0
答えたくない	208	1.2	37	1.7	105	1.1
合計	16,768	100.0	2,183	100.0	9,487	100.0

	中学生			
	いる		いない	
	回答数	%	回答数	%
わすれものをした	474	79.5	3,427	76.1
学校を欠席した	279	46.8	1,815	40.3
習いごとや部活動を休んだ	300	50.3	2,032	45.1
宿題や課題ができなかった、または終わらなかった	305	51.2	1,839	40.8
学校を遅刻した、または早たいした	239	40.1	1,532	34.0
つかれて学校に行きたくなくなった	210	35.2	1,377	30.6
授業中にいねわりをした	197	33.1	1,207	26.8
家族と過ごす楽しい時間が少なかった	93	15.6	500	11.1
友達とあそんだり、話したりする時間が少なかった	63	10.6	393	8.7
家族のことで自分の時間がとれなかった	54	9.1	126	2.8
学校には行ったが、ほとんど保健室で過ごした	11	1.8	60	1.3
わからない	24	4.0	182	4.0
答えたくない	11	1.8	55	1.2
合計	596	100.0	4,502	100.0

## (2) 一緒にお世話をしている人の有無別にみた日常生活への影響

※小学3～6年生・中学1～3年生対象

- ・家族のお世話について「だれかといっしょにすることが多い」から「いつも一人でしている」まで、お世話をしている人が少なくなるにつれて割合が上がる項目をみると、小学3～6年生では「いつもつかれている」が最も差が大きく、「いつも一人でしている」が29.6%、「だれかといっしょにすることが多い」が11.1%で、その差は18.5ポイントであった。
- ・中学生では「いつも家族のことが心配」の差が最も大きく、「いつも一人でしている」が13.6%、「だれかといっしょにすることが多い」が3.1%で、その差は10.5ポイントであった。

図表 1-5-3 一緒にお世話をしている人 × 生活への影響

	全体		小学校3～6年生							
			いつも一人でしている		ほとんど一人でしている		半分くらいはだれかといっしょにしている		だれかといっしょにすることが多い	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
いつもつかれている	193	15.1	29	29.6	43	23.8	39	17.6	42	11.1
やる気が出ない	139	10.8	20	20.4	25	13.8	26	11.7	30	7.9
自分がやらなければならないと思う	128	10.0	15	15.3	24	13.3	34	15.3	25	6.6
ねむりづらい	111	8.7	16	16.3	21	11.6	18	8.1	31	8.2
いつも家族のことが心配	108	8.4	14	14.3	21	11.6	25	11.3	22	5.8
自分の将来に不安を感じる	92	7.2	12	12.2	17	9.4	16	7.2	22	5.8
ねているときに何度も目がさめる	88	6.9	15	15.3	18	9.9	19	8.6	25	6.6
自分のことより家族の世話をする	68	5.3	11	11.2	20	11.0	16	7.2	12	3.2
家にいるとつらいと感じる	54	4.2	8	8.2	12	6.6	9	4.1	7	1.9
休む時間がない	45	3.5	11	11.2	9	5.0	6	2.7	5	1.3
相談できる人がいない	38	3.0	6	6.1	12	6.6	3	1.4	8	2.1
ねる時間がない	36	2.8	5	5.1	8	4.4	6	2.7	4	1.1
自分だけがお世話をすることをふまんに思う	28	2.2	8	8.2	12	6.6	3	1.4	2	0.5
その他	55	4.3	6	6.1	10	5.5	14	6.3	20	5.3
とくにならない	718	56.0	30	30.6	83	45.9	118	53.2	221	58.5
わからない	92	7.2	10	10.2	8	4.4	11	5.0	37	9.8
答えたくない	29	2.3	6	6.1	1	0.6	2	0.9	12	3.2
合計	1,282	100.0	98	100.0	181	100.0	222	100.0	378	100.0

	中学生							
	いつも一人でしている		ほとんど一人でしている		半分くらいはだれかといっしょにしている		だれかといっしょにすることが多い	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
いつもつかれている	7	15.9	9	12.3	15	15.8	9	4.7
やる気が出ない	5	11.4	8	11.0	11	11.6	14	7.3
自分がやらなければならないと思う	7	15.9	6	8.2	13	13.7	4	2.1
ねむりづらい	3	6.8	7	9.6	8	8.4	7	3.7
いつも家族のことが心配	6	13.6	7	9.6	7	7.4	6	3.1
自分の将来に不安を感じる	5	11.4	3	4.1	11	11.6	6	3.1
ねているときに何度も目がさめる	2	4.5	2	2.7	3	3.2	4	2.1
自分のことより家族の世話をする	2	4.5	3	4.1	2	2.1	2	1.0
家にいるとつらいと感じる	3	6.8	3	4.1	6	6.3	6	3.1
休む時間がない	4	9.1	1	1.4	4	4.2	5	2.6
相談できる人がいない	1	2.3	2	2.7	2	2.1	4	2.1
ねる時間がない	3	6.8	2	2.7	3	3.2	5	2.6
自分だけがお世話をすることをふまんに思う	0	0.0	2	2.7	1	1.1	0	0.0
その他	0	0.0	1	1.4	2	2.1	2	1.0
とくにならない	23	52.3	45	61.6	54	56.8	144	75.4
わからない	5	11.4	6	8.2	8	8.4	7	3.7
答えたくない	0	0.0	1	1.4	0	0.0	7	3.7
合計	44	100.0	73	100.0	95	100.0	191	100.0

### (3) お世話の頻度別にみたお世話の時間（平日）

※小学3～6年生・中学1～3年生対象

- ・お世話の頻度が「ほぼ毎日」の児童・生徒では、平日1日のお世話の時間は「2時間未満」が最も多く、小学3～6年生では40.5%、中学生では35.3%であった。一方で、お世話の頻度が「ほぼ毎日」の児童・生徒のうち、平日「4時間以上」お世話をしている児童・生徒は、小学3～6年生では21.4%、中学生では29.4%みられた。

図表 1-5-4 お世話をしている頻度 × 平日1日にしているお世話の時間

	全体		小学校3～6年生							
			ほぼ毎日		週に3～5日		週に1～2日		もっと少ない	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
2時間未満	87	48.1	34	40.5	22	59.5	17	70.8	0	0.0
2時間～4時間未満	52	28.7	29	34.5	8	21.6	3	12.5	1	50.0
4時間以上	32	17.7	18	21.4	5	13.5	1	4.2	1	50.0
無回答	10	5.5	3	3.6	2	5.4	3	12.5	0	0.0
合計	181	100.0	84	100.0	37	100.0	24	100.0	2	100.0

	中学生							
	ほぼ毎日		週に3～5日		週に1～2日		もっと少ない	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
2時間未満	6	35.3	3	33.3	2	50.0	3	75.0
2時間～4時間未満	6	35.3	5	55.6	0	0.0	0	0.0
4時間以上	5	29.4	0	0.0	2	50.0	0	0.0
無回答	0	0.0	1	11.1	0	0.0	1	25.0
合計	17	100.0	9	100.0	4	100.0	4	100.0

### (4) お世話の頻度別にみた日常生活への影響

※小学3～6年生・中学1～3年生対象

- ・お世話の頻度が「(週に1～2日より)もっと少ない」から「ほぼ毎日」まで、お世話の頻度が多くなるにつれて割合が上がっている項目をみると、小学3～6年生では「自分がやらなければならないと思う」が最も差が大きく、「ほぼ毎日」が17.2%、「もっと少ない」が1.2%で、その差は16.0ポイントであった。次いで「いつもつかれている」が続き、「ほぼ毎日」が23.8%、「もっと少ない」が8.3%で、その差は15.5ポイントであった。
- ・中学生も同様に「自分がやらなければならないと思う」の差が最も大きく、「ほぼ毎日」が17.8%、「もっと少ない」が0.0%で、17.8ポイントの差であった。次いで「いつもつかれている」が続き、「ほぼ毎日」が16.8%、「もっと少ない」が1.8%で、その差は15.0ポイントであった。

図表 1-5-5 お世話をしている頻度 × 生活への影響

	全体		小学校3～6年生							
			ほぼ毎日		週に3～5日		週に1～2日		もっと少ない	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
いつもつかれている	184	14.4	76	23.8	30	15.0	26	14.8	14	8.3
やる気が出ない	131	10.3	49	15.4	16	8.0	16	9.1	12	7.1
自分がやらなければならないと思う	124	9.7	55	17.2	24	12.0	12	6.8	2	1.2
いつも家族のことが心配	108	8.5	41	12.9	21	10.5	14	8.0	6	3.6
ねむりづらい	105	8.2	47	14.7	11	5.5	12	6.8	10	6.0
自分の将来に不安を感じる	90	7.1	27	8.5	12	6.0	17	9.7	10	6.0
ねているときに何度も目がさめる	85	6.7	38	11.9	15	7.5	14	8.0	7	4.2
自分のことより家族の世話をする	65	5.1	36	11.3	11	5.5	7	4.0	2	1.2
家にいるとつらいと感じる	55	4.3	26	8.2	5	2.5	3	1.7	4	2.4
休む時間がない	45	3.5	19	6.0	5	2.5	3	1.7	3	1.8
相談できる人がいない	37	2.9	14	4.4	5	2.5	6	3.4	3	1.8
ねる時間がない	35	2.7	10	3.1	5	2.5	3	1.7	2	1.2
自分だけがお世話をすることをふまんに思う	28	2.2	15	4.7	4	2.0	4	2.3	1	0.6
その他	51	4.0	14	4.4	10	5.0	11	6.3	10	6.0
とくにない	722	56.7	135	42.3	104	52.0	101	57.4	112	66.7
わからない	100	7.8	21	6.6	15	7.5	13	7.4	16	9.5
答えたくない	19	1.5	9	2.8	2	1.0	1	0.6	2	1.2
合計	1,274	100.0	319	100.0	200	100.0	176	100.0	168	100.0

	中学生							
	ほぼ毎日		週に3～5日		週に1～2日		もっと少ない	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
いつもつかれている	18	16.8	11	11.1	7	7.5	2	1.8
やる気が出ない	18	16.8	7	7.1	10	10.8	3	2.7
自分がやらなければならないと思う	19	17.8	7	7.1	5	5.4	0	0.0
いつも家族のことが心配	17	15.9	6	6.1	3	3.2	0	0.0
ねむりづらい	10	9.3	7	7.1	6	6.5	2	1.8
自分の将来に不安を感じる	9	8.4	7	7.1	5	5.4	3	2.7
ねているときに何度も目がさめる	8	7.5	0	0.0	2	2.2	1	0.9
自分のことより家族の世話をする	6	5.6	2	2.0	0	0.0	1	0.9
家にいるとつらいと感じる	10	9.3	2	2.0	3	3.2	2	1.8
休む時間がない	7	6.5	3	3.0	4	4.3	1	0.9
相談できる人がいない	6	5.6	1	1.0	1	1.1	1	0.9
ねる時間がない	11	10.3	1	1.0	2	2.2	1	0.9
自分だけがお世話をすることをふまんに思う	1	0.9	2	2.0	1	1.1	0	0.0
その他	1	0.9	2	2.0	1	1.1	2	1.8
とくにない	53	49.5	64	64.6	64	68.8	89	79.5
わからない	9	8.4	9	9.1	6	6.5	11	9.8
答えたくない	2	1.9	1	1.0	1	1.1	1	0.9
合計	107	100.0	99	100.0	93	100.0	112	100.0

## (5) お世話の開始年齢別にみた相談相手

※小学3～6年生・中学1～3年生対象

- ・お世話の開始年齢別に相談相手を見ると、開始年齢が高くなるほど「だれにも相談したことがない」の割合が高くなる傾向がみられる。小学3～6年生では、「6歳未満」の33.3%に対し、「10歳以上」では52.7%となる。また、中学生では、「6歳未満」の23.5%に対し、「8～9歳」では62.5%となる（「10歳以上」でも52.2%）。

図表 1-5-6 お世話の開始年齢 × 相談相手

	全体		小学校3～6年生							
			6歳未満		6～7歳		8～9歳		10歳以上	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
お父さん、お母さん	166	27.9	36	30.0	55	31.8	36	34.3	11	20.0
おじいさん、おばあさん	31	5.2	9	7.5	12	6.9	6	5.7	1	1.8
きょうだい	41	6.9	9	7.5	11	6.4	7	6.7	6	10.9
しんせき(おじ、おばなど)	7	1.2	3	2.5	0	0.0	1	1.0	0	0.0
友だち	83	13.9	17	14.2	33	19.1	8	7.6	4	7.3
学校の先生(保健室の先生以外)	18	3.0	4	3.3	4	2.3	3	2.9	1	1.8
保健室の先生	4	0.7	1	0.8	0	0.0	0	0.0	1	1.8
スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー	16	2.7	3	2.5	5	2.9	3	2.9	0	0.0
病院・医療・福祉サービスの人	2	0.3	0	0.0	1	0.6	0	0.0	0	0.0
近よの人	5	0.8	3	2.5	2	1.2	0	0.0	0	0.0
LINEなどSNS上の知り合い	8	1.3	2	1.7	1	0.6	1	1.0	1	1.8
ゲームなどインターネット上の知り合い	5	0.8	2	1.7	0	0.0	2	1.9	0	0.0
自分と同じような経験をしている人	17	2.9	6	5.0	6	3.5	1	1.0	0	0.0
その他	23	3.9	6	5.0	7	4.0	3	2.9	2	3.6
だれにも相談したことがない	227	38.2	40	33.3	52	30.1	40	38.1	29	52.7
わからない	117	19.7	27	22.5	38	22.0	17	16.2	10	18.2
答えたくない	12	2.0	4	3.3	3	1.7	2	1.9	0	0.0
合計	595	100.0	120	100.0	173	100.0	105	100.0	55	100.0

	中学生							
	6歳未満		6～7歳		8～9歳		10歳以上	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
お父さん、お母さん	9	52.9	5	26.3	2	12.5	12	13.3
おじいさん、おばあさん	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3	3.3
きょうだい	1	5.9	0	0.0	1	6.3	6	6.7
しんせき(おじ、おばなど)	0	0.0	0	0.0	1	6.3	2	2.2
友だち	4	23.5	2	10.5	2	12.5	13	14.4
学校の先生(保健室の先生以外)	0	0.0	2	10.5	0	0.0	4	4.4
保健室の先生	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.2
スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー	1	5.9	4	21.1	0	0.0	0	0.0
病院・医療・福祉サービスの人	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.1
近よの人	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
LINEなどSNS上の知り合い	0	0.0	1	5.3	0	0.0	2	2.2
ゲームなどインターネット上の知り合い	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.1
自分と同じような経験をしている人	0	0.0	2	10.5	1	6.3	1	1.1
その他	1	5.9	1	5.3	0	0.0	3	3.3
だれにも相談したことがない	4	23.5	5	26.3	10	62.5	47	52.2
わからない	1	5.9	4	21.1	3	18.8	17	18.9
答えたくない	1	5.9	0	0.0	0	0.0	2	2.2
合計	17	100.0	19	100.0	16	100.0	90	100.0

## (6) お世話の開始年齢別にみた相談したことがない理由

- ・相談したことがない理由として、「相談するほどのなやみではないから」が全体でも70.0%を占めて最も多い。小学校3～6年生では、お世話の開始年齢が「8～9歳」「10歳以上」と高くなるほど、「相談するほどのなやみではないから」の割合が高くなる傾向にある（中学生は回答数が少ないため参考扱い）。

図表 1-5-7 お世話の開始年齢 × 相談したことがない理由

	全体		小学校3～6年生							
			6歳未満		6～7歳		8～9歳		10歳以上	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
相談するほどのなやみではないから	159	70.0	24	60.0	34	65.4	30	75.0	21	72.4
だれに相談するのがよいかわからないから	13	5.7	2	5.0	5	9.6	4	10.0	1	3.4
相談しても何も変わらないから	11	4.8	3	7.5	3	5.8	1	2.5	1	3.4
家族のことを話したくないから	7	3.1	1	2.5	3	5.8	0	0.0	1	3.4
相談できる人がいないから	3	1.3	2	5.0	0	0.0	1	2.5	0	0.0
その他	12	5.3	1	2.5	3	5.8	0	0.0	2	6.9
理由はとくにないが、相談しようと思わなかった	36	15.9	10	25.0	8	15.4	7	17.5	5	17.2
わからない	13	5.7	4	10.0	3	5.8	2	5.0	2	6.9
答えたくない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合計	227	100.0	40	100.0	52	100.0	40	100.0	29	100.0

	中学生							
	6歳未満		6～7歳		8～9歳		10歳以上	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
相談するほどのなやみではないから	2	50.0	5	100.0	8	80.0	35	74.5
だれに相談するのがよいかわからないから	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	2.1
相談しても何も変わらないから	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3	6.4
家族のことを話したくないから	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	4.3
相談できる人がいないから	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
その他	2	50.0	0	0.0	1	10.0	3	6.4
理由はとくにないが、相談しようと思わなかった	0	0.0	0	0.0	1	10.0	5	10.6
わからない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	4.3
答えたくない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合計	4	100.0	5	100.0	10	100.0	47	100.0



## Ⅱ. 学校向けアンケート調査

### 1. 調査実施概要

---

#### ◆調査のねらい

- ・杉並区におけるヤングケアラー支援強化に向けて、日ごろから子どもたちやその家族と密接に関わりを持つ小・中学校のヤングケアラーに対する認識や対応について実態を把握するとともに、今後の支援の方向性等についての認識・意向を把握する。

#### ◆調査対象

- ・杉並区立学校全校（小学校 40 校、中学校 23 校、計 63 校）に所属している管理職または教員の中から、学校全体のヤングケアラーの状況を回答できる方を想定（回答は、1 校につき 1 人）

#### ◆回答方法

- ・パソコンやタブレット端末等を使用して、WEB アンケート票にアクセスして回答した。
- ・設問は、チェックボックスにて選択肢を選ぶ設問、数字や具体的な内容を入力いただく設問から構成した。

#### ◆調査期間

- ・令和 5 年 8 月 28 日～9 月 22 日

## 2. 基本情報

### (1) 学校の種類

#### ① 学校の種類

- ・回答は杉並区内の小・中学校（計 63 校）の 87.3%にあたる 55 校から寄せられた。うち、小学校が 35 校（63.6%）、中学校が 19 校（34.5%）、小中一貫校が 1 校（1.8%）だった。

図表 2-2-1 学校の種類

	回答数	%
小学校	35	63.6
中学校	19	34.5
その他（小中一貫校）	1	1.8
合計	55	100.0

#### ② 在籍児童・生徒数（令和 5 年 9 月 1 日現在）

- ・在籍者数の平均は 457.8 人だった。分布は下表のとおりである。

図表 2-2-2 在籍児童・生徒数

	回答数	%
300人未満	12	21.8
300~399人	7	12.7
400~499人	16	29.1
500~599人	11	20.0
600人以上	9	16.4
合計	55	100.0

### (2) 回答者の役職

- ・回答者の役職は、「副校長」が 67.3%で最も多く、次いで「校長」の 20.0%と続く。

図表 2-2-3 回答者の役職

	回答数	%
校長	11	20.0
副校長	37	67.3
主幹	4	7.3
主任教諭	2	3.6
教諭	0	0.0
養護教諭	1	1.8
その他	0	0.0
合計	55	100.0

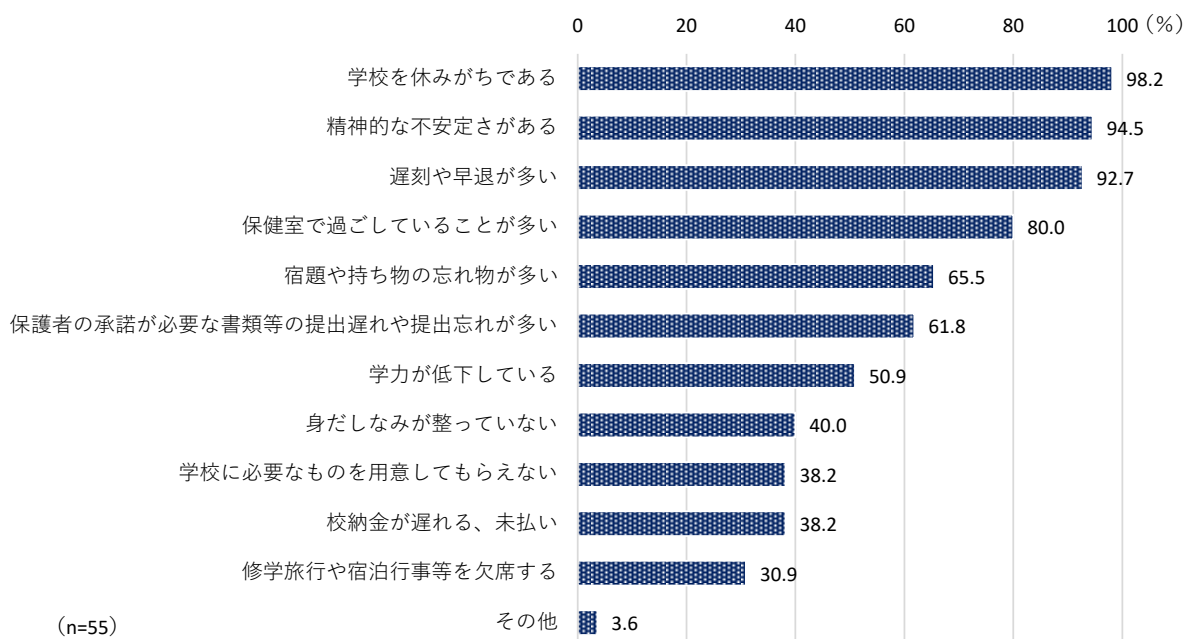
### 3. 支援が必要だと思われる子どもへの対応

#### (1) 校内で共有しているケース

##### ① 校内で共有しているケース

- ・校内で共有しているケースについて、該当する状態像を聞いたところ、「学校を休みがちである」(98.2%)、「精神的な不安定さがある」(94.5%)、「遅刻や早退が多い」(92.7%)が9割を超えていた。

図表 2-3-1 校内で共有しているケース（複数回答）



##### ② 校内で共有しているケースに対する情報共有・対応検討の体制

- ・上記①のケースに関する校内の情報共有・対応検討の体制については、「校内の検討体制で検討している」がほとんどで、「個別に対応している（決まった検討体制はない）」は1校にとどまった。
- ・「個別に対応している（決まった検討体制はない）」と回答した1校の対応方法は、「気になることがあった場合は、担任、管理職、養護教諭、生活指導主任を中心に集まって、情報の共有と対応の検討を行っている。その都度迅速に対応している」との回答だった。

図表 2-3-2 ケースに対する情報共有・対応検討の体制

	回答数	%
校内の検討体制で検討している	54	98.2
個別に対応している（決まった検討体制はない）	1	1.8
合計	55	100.0

### ③ 情報共有・対応検討の体制

- ・上記②で「校内の検討体制で検討している」と回答した 54 校に対し、その体制について具体的に伺った。

#### ◆情報共有・対応の検討の方法等

- ・まず、情報共有・対応検討の方法等については、「生活指導部・委員会など」が 88.9% で最も多く、次いで「特別支援教育コーディネーターなど学校内・関係機関との連絡調整・会議開催の調整など児童・生徒の抱える課題の解決に向けて調整役として活動する教職員の配置・指名」の 70.4%、「児童生徒理解・支援シートなど共通様式による情報共有」の 63.0%、「ケース会議」の 59.3%と続く。
- ・「その他」の回答では、「学年会」や「生活指導夕会」、「特別支援校内委員会」があげられた。

図表 2-3-3 情報共有・対応の検討の方法等（複数回答）

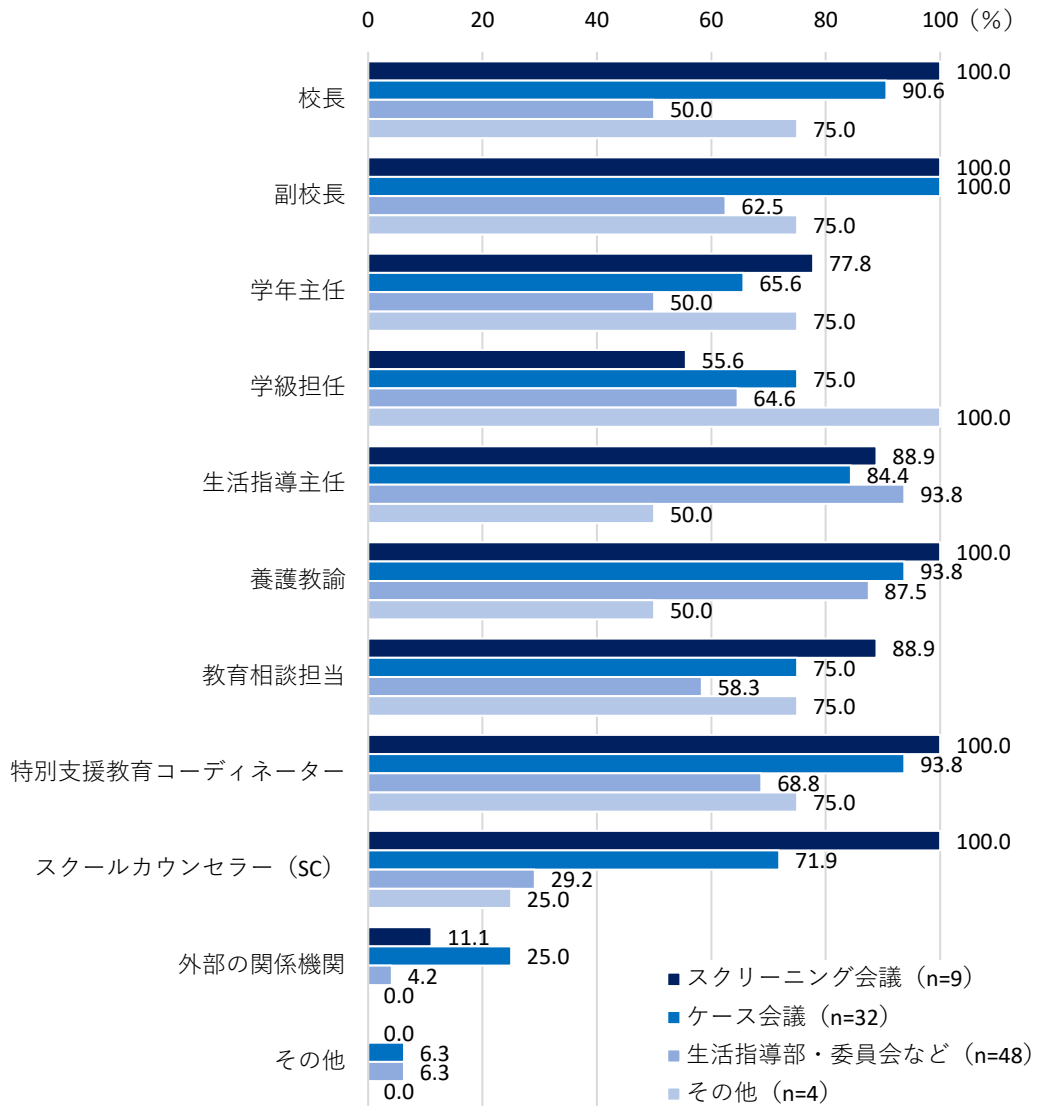
	回答数	%
生活指導部・委員会など	48	88.9
特別支援教育コーディネーターなど学校内・関係機関との連絡調整・会議開催の調整など児童・生徒の抱える課題の解決に向けて調整役として活動する教職員の配置・指名	38	70.4
児童生徒理解・支援シートなど共通様式による情報共有	34	63.0
ケース会議	32	59.3
スクリーニング会議	9	16.7
その他	4	7.4
合計	54	100.0

※本調査において「スクリーニング会議」とは、「すべての子どもを対象として、問題の未然防止のために、データに基づいて、潜在的に支援の必要な子どもや家庭を適切な支援につなぐための迅速な識別を行う会議」とした。

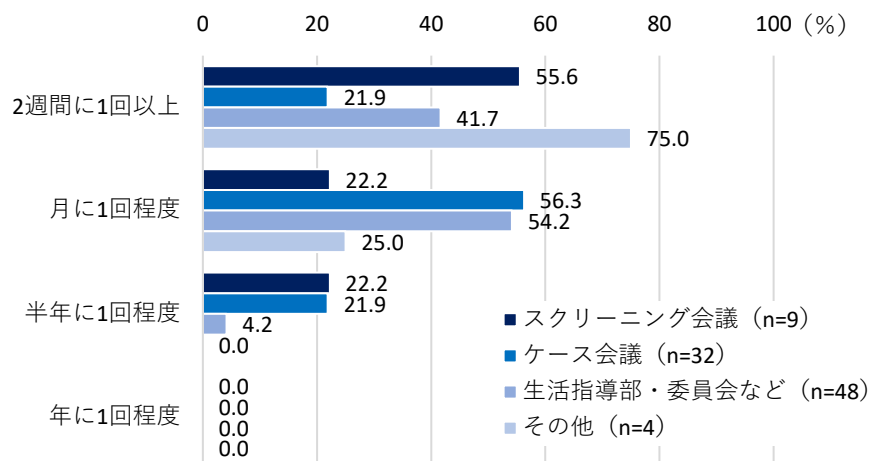
#### ◆参加教員と会議の頻度

- ・上記において「スクリーニング会議」、「ケース会議」、「生活指導部・委員会など」、「その他」のいずれかを選択した学校には、参加している教職員と会議の頻度を聞いた。結果は下記図表のとおりであるが、「ケース会議」の場合は、「スクールカウンセラー(SC)」や「外部の関係機関」の割合が比較的高い。
- ・「外部の関係機関」の具体的な回答としては、「子ども家庭支援センター」や「スクールソーシャルワーカー」、「児童相談所」、「特別支援教育専門員」、「生活指導部所属職員」などがあげられた。

図表 2-3-4 参加している教職員（複数回答）



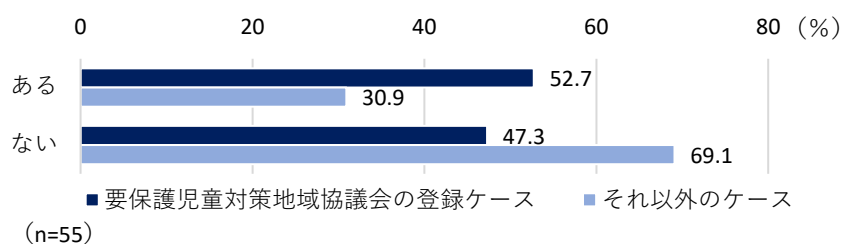
図表 2-3-5 会議の頻度



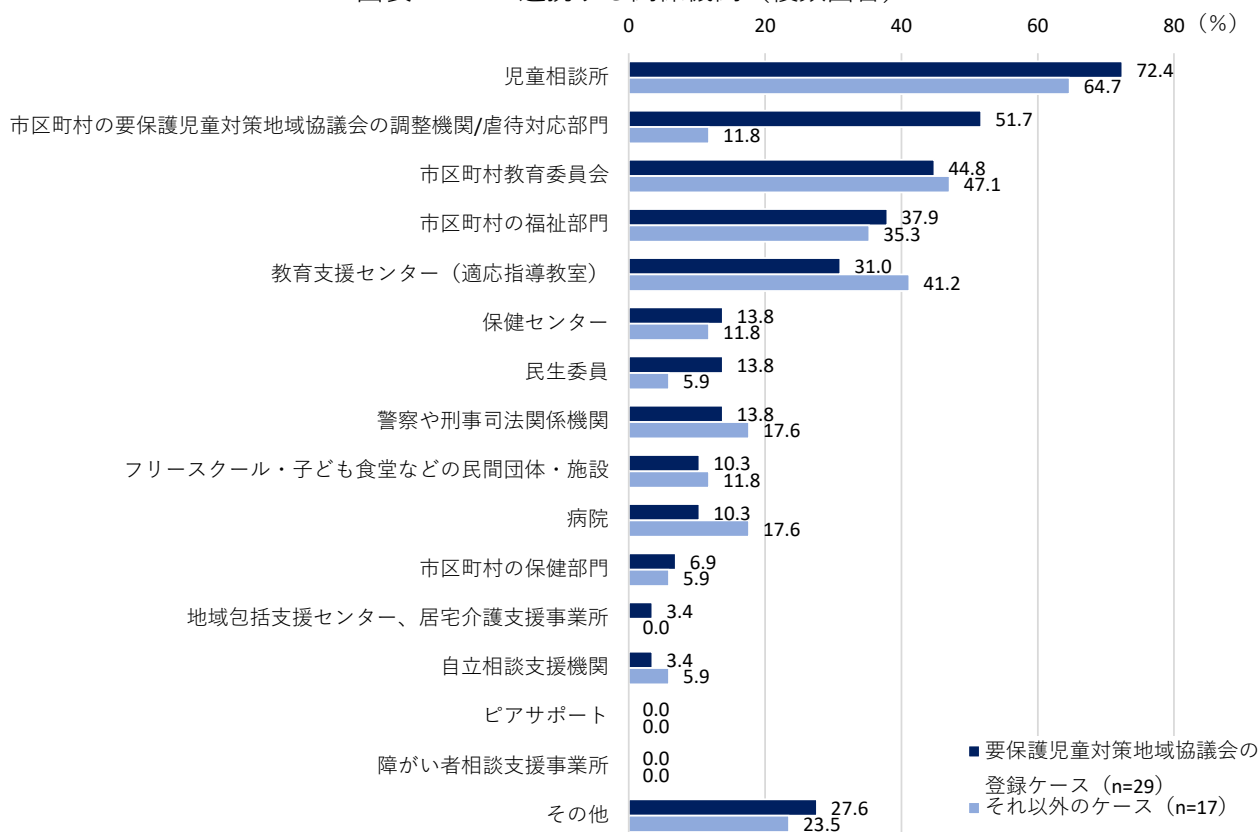
## (2) 学校以外の関係機関との連携

- ・「(1) ① 校内で共有しているケース」について、学校以外の関係機関と連携して、必要に応じて情報共有や対応の検討を行うための体制があるか聞いたところ、要保護児童対策地域協議会の登録ケースの場合は「ある」が52.7%、それ以外のケースの場合は「ある」が30.9%であった。
- ・「ある」を選択した学校に対し、連携する関係機関を聞いたところ、要保護児童対策地域協議会の登録ケースの場合は「児童相談所」が72.4%で最も多く、次いで「市区町村の要保護児童対策地域協議会の調整機関/虐待対応部門」の51.7%と続く。それ以外のケースの場合も同様に、最も多いのは「児童相談所」の64.7%であるが、次いで多いのは「市町村教育委員会」の47.1%であった。それ以外のケースの場合は、「教育支援センター（適応指導教室）」や「病院」の割合が比較的高い。
- ・「その他」の回答としては、「子ども家庭支援センター」や「主治医」などがあげられた。

図表 2-3-6 外部の関係機関との検討体制の有無



図表 2-3-7 連携する関係機関（複数回答）



## 4. 校内におけるヤングケアラーの実態

### (1) ヤングケアラーの把握

#### ① ヤングケアラーの共通理解を深めるための場の設定

- ・学校として「ヤングケアラー」の共通理解を深める場を設けたことがあるか聞いたところ、「会議や研修等を通じて、学校として『ヤングケアラー』の共通理解を深める場を設けた」が50.9%、「学校として『ヤングケアラー』の共通理解を深める場を設けるなどの特別な対応はしていない」が49.1%で半々となった。

図表 2-4-1 校内の共通理解を深めるための場の設定

	回答数	%
会議や研修等を通じて、学校として「ヤングケアラー」の共通理解を深める場を設けた	28	50.9
学校として「ヤングケアラー」の共通理解を深める場を設けるなどの特別な対応はしていない	27	49.1
合計	55	100.0

#### ② ヤングケアラーと思われる子どもの実態把握

- ・ヤングケアラーと思われる子どもの実態把握の有無については、「把握している」が29.1%、「『ヤングケアラー』と思われる子どもはいるが、その実態は把握していない」が23.6%で、約半数が「該当する子どもはいる（これまでもいなかった）」であった。

図表 2-4-2 ヤングケアラーの実態把握

	回答数	%
把握している	16	29.1
「ヤングケアラー」と思われる子どもはいるが、その実態は把握していない	13	23.6
該当する子どもはいる（これまでもいなかった）	26	47.3
合計	55	100.0

- ・上記において「把握している」と回答した16校に、その把握方法を聞いたところ、全校が「特定のツールはないが、できるだけ『ヤングケアラー』の視点を持って検討・対応している」との回答だった。

図表 2-4-3 ヤングケアラーの把握方法（複数回答）

	回答数	%
児童生徒の変化に気づくためのチェックリストなどのツールを用いている	0	0.0
特定のツールはないが、できるだけ「ヤングケアラー」の視点を持って検討・対応している	16	100.0
その他	0	0.0
合計	16	100.0

## (2) ヤングケアラーの実態

### ① ヤングケアラーと思われる子どもの有無

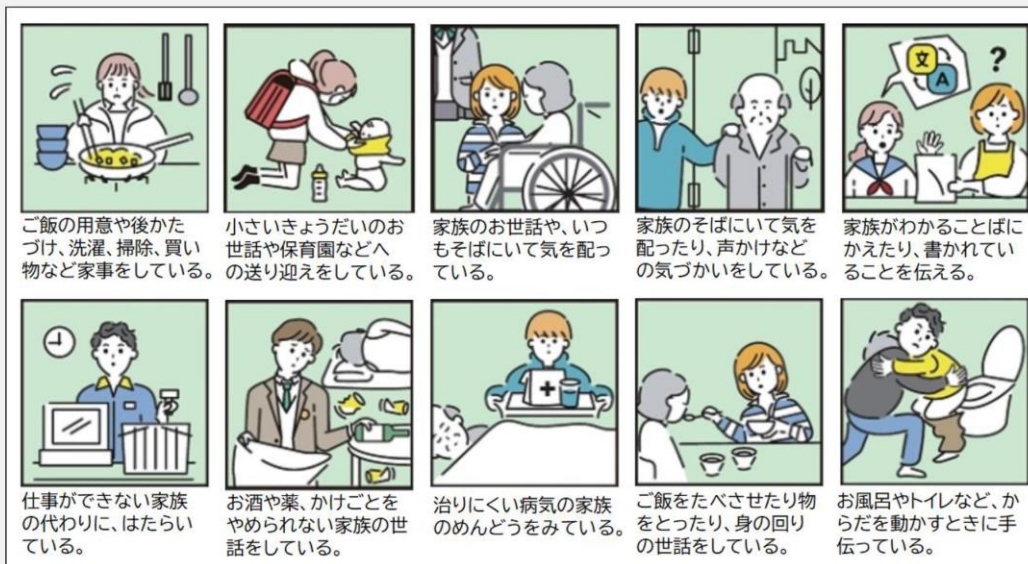
- ・下記のとおりヤングケアラーの定義（「ヤングケアラー」とは）を調査票上で示した上で、現在、校内にヤングケアラーと思われる（可能性も含めて）子どもがいるか聞いたところ、「いる」が38.2%、「いない」が32.7%、「わからない」が29.1%であった。

図表 2-4-4 ヤングケアラーの有無

	回答数	%
いる	21	38.2
いない	18	32.7
わからない	16	29.1
合計	55	100.0

#### 「ヤングケアラー」とは

- 心や身体に不調をかかえている家族がいる場合もあります。こうした家族に対して、必要なケア（「お世話」、「介護」、「看病」、「気づかい」など）をしている人を、一般的に「ケアラー」と呼びます。
- 下の図のように、「ケアラー」の中でも、本来なら大人が担うと想定されている家事や家族のお世話などを日常的に行うことにより、子ども自身の権利や生活が守られていない（例えば、子ども自身がやりたいことができないなど）と思われる18才未満の子どものことを「ヤングケアラー」と呼びます（下の図にあてはまらないようなお世話をしている場合もあります）。



※子ども家庭庁の資料をもとに解説文を一部変更しました。



## ② ヤングケアラーと思われる子どもの実態

- ・校内にヤングケアラーと思われる子どもが「いる」と回答した21校に、その人数を学年ごと聞いたところ、中学2年生が8人、中学3年生が7人と比較的多く、合計人数は32人であった。
- ・この合計人数を本調査において回答のあった55校の全在籍者数(25,177人)で割ると、ヤングケアラーと思われる子どもの割合は0.13%となる。

図表 2-4-5 ヤングケアラーと思われる児童・生徒の人数

	人数
小学1年生	0
小学2年生	1
小学3年生	4
小学4年生	5
小学5年生	1
小学6年生	4
中学1年生(小中一貫教育校は7年生)	2
中学2年生(小中一貫教育校は8年生)	8
中学3年生(小中一貫教育校は9年生)	7
合計	32

- ・同じく、校内にヤングケアラーと思われる子どもが「いる」と回答した21校に、その子どもの状況を聞いたところ、最も多かったのが「家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている」(61.9%)で、次いで多かったのは「障がいや病気のある家族に代わり、家事(買い物、料理、洗濯、掃除など)をしている」(19.0%)だった。

図表 2-4-6 ヤングケアラーと思われる子どもの状況(複数回答)

	回答数	%
家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている	13	61.9
障がいや病気のある家族に代わり、家事(買い物、料理、洗濯、掃除など)をしている	4	19.0
家族の代わりに、障がいや病気のあるきょうだいの世話をしている	2	9.5
アルコール・薬物・ギャンブルなどの問題のある家族に対応している	2	9.5
家族の通訳をしている(日本語や手話など)	1	4.8
障がいや病気のある家族の身の回りの世話をしている	1	4.8
目を離せない家族の見守りや声掛けをしている	0	0.0
病気の家族の看病をしている	0	0.0
障がいや病気のある家族の入浴やトイレの介助をしている	0	0.0
その他	3	14.3
合計	21	100.0

### ③ 外部の支援につないだケースの有無

- ・ヤングケアラーと思われる子どもについて、学校以外の外部の支援につないだケースがあるか聞いたところ、「子ども家庭支援センターやスクールソーシャルワーカーなど、学校以外の外部の支援につないだケースがある」が57.1%、「外部の支援にはつないでいない（学校で対応している）」が42.9%で、どちらかという外部の支援につないだケースのほうが多くなっている。

図表 2-4-7 外部の支援につないだケース（複数回答）

	回答数	%
子ども家庭支援センターやスクールソーシャルワーカーなど、学校以外の外部の支援につないだケースがある	12	57.1
外部の支援にはつないでいない（学校内で対応している）	9	42.9
合計	21	100.0

### ④ 外部の支援につないだケースの詳細

- ・「子ども家庭支援センターやスクールソーシャルワーカーなど、学校以外の外部の支援につないだケースがある」と回答した12校に、直近のケース1件の詳細を聞いた。

#### ◆性別・学年

- ・外部の支援につないだ直近のケースでは、性別は「女子」が66.7%、学年は「中学2年生（小中一貫教育校は8年生）」が41.7%である。

図表 2-4-8 性別

	回答数	%
男子	4	33.3
女子	8	66.7
合計	12	100.0

図表 2-4-9 学年

	回答数	%
小学1年生	0	0.0
小学2年生	0	0.0
小学3年生	2	16.7
小学4年生	3	25.0
小学5年生	0	0.0
小学6年生	0	0.0
中学1年生（小中一貫教育校は7年生）	0	0.0
中学2年生（小中一貫教育校は8年生）	5	41.7
中学3年生（小中一貫教育校は9年生）	2	16.7
合計	12	100.0

#### ◆学校生活の状況

- ・学校生活の状況は、「遅刻や早退が多い」が66.7%で最も多く、次いで「精神的な不安定さがある」の58.3%、「学力が低下している」と「保護者の承諾が必要な書類等の提出遅れや提出忘れが多い」がそれぞれ41.7%と続く。

図表 2-4-10 学校生活の状況（複数回答）

	回答数	%
遅刻や早退が多い	8	66.7
精神的な不安定さがある	7	58.3
学力が低下している	5	41.7
保護者の承諾が必要な書類等の提出遅れや提出忘れが多い	5	41.7
学校を休みがちである	4	33.3
宿題や持ち物の忘れ物が多い	3	25.0
保健室で過ごしていることが多い	2	16.7
身だしなみが整っていない	2	16.7
学校に必要なものを用意してもらえない	2	16.7
校納金が遅れる、未払い	1	8.3
修学旅行や宿泊行事等を欠席する	0	0.0
その他	0	0.0
合計	12	100.0

#### ◆家族構成

- ・家族構成は、「母親」は100.0%であるが、「父親」が16.7%にとどまることから、母子家庭が多いことがわかる。

図表 2-4-11 家族構成（複数回答）

	回答数	%
母親	12	100.0
父親	2	16.7
祖母	2	16.7
祖父	0	0.0
きょうだい	9	75.0
その他	1	8.3
合計	12	100.0

#### ◆ケアを必要としている人の状況

- ・ケアを必要としている人は、「きょうだい」が 66.7%で最も多く、次いで、「母親」の 25.0%と続く。ケアを必要としている人の状態は、「若い」が 33.3%で最も多く、次いで「精神疾患(疑い含む)」の 16.7%と続く。ケアの内容は、「家事(食事の準備や掃除、洗濯)」(66.7%)と「きょうだいの世話や保育所等への送迎など」(41.7%)が多い。

図表 2-4-12 ケアを必要としている人(複数回答)

	回答数	%
母親	3	25.0
父親	0	0.0
祖母	1	8.3
祖父	0	0.0
きょうだい	8	66.7
その他	0	0.0
わからない	1	8.3
合計	12	100.0

図表 2-4-13 ケアを必要としている人の状況(複数回答)

	回答数	%
高齢(65歳以上)	1	8.3
若い	4	33.3
要介護(介護が必要な状態)	0	0.0
認知症	0	0.0
身体障がい	1	8.3
知的障がい	0	0.0
精神疾患(疑い含む)	2	16.7
依存症(疑い含む)	0	0.0
精神疾患、依存症以外の病気	0	0.0
日本語を第一言語としない	0	0.0
その他	2	16.7
わからない	3	25.0
合計	12	100.0

図表 2-4-14 ケアの内容(複数回答)

	回答数	%
家事(食事の準備や掃除、洗濯)	8	66.7
きょうだいの世話や保育所等への送迎など	5	41.7
身体的な介護(入浴やトイレのお世話など)	0	0.0
外出の付き添い(買い物、散歩など)	0	0.0
通院の付き添い	1	8.3
感情面のサポート(愚痴を聞く、話し相手になるなど)	2	16.7
見守り	2	16.7
通訳(日本語や手話など)	0	0.0
金銭管理	0	0.0
薬の管理	0	0.0
その他	1	8.3
わからない	1	8.3
合計	12	100.0

#### ◆外部の支援につないだ結果として子どもの変化（自由回答）

- ・外部の支援につなげた直近のケースに関して、外部の支援につなげた結果、子どもの変化について聞いたところ、下記の回答があげられた。

- 自分の状況を客観的に説明できるようになった。
- 外部支援者に気持ちを表出できたことで、多少の安定感を持つことができた。
- 様々な人が関わったことで、恒常的にケアに子供が入る状況が回避されている。
- 子ども家庭支援センターを介して、母親へ連絡し、今現在は妹の小学校への送迎は行う必要がなくなった。本人の特性として、自分が家族のためにやらなければならないという強い思いから、妹の面倒を見ていたという要素を含む。
- 母親の体調が安定しているため、以前よりは状況が改善している（欠席、遅刻は減少している）。

※自由回答については一部を紹介する。内容が重複している意見及び同様の意見は省略している。必ずしも原文のままではないが、なるべく回答者の表現を用いる形で記載している（以下同様）。

#### ⑤ 外部の支援につないでいない場合の理由と対応方法

- ・上記③において「外部の支援にはつないでいない（学校内で対応している）」と回答した9校に、その理由と対応方法を聞いた。

#### ◆外部の支援につなげなかった理由（自由回答）

- ・理由としては、「外部の支援につなぐまでの状況ではない」や「すでに外部機関とつながっている」、「過去に外部機関を紹介したが、実際にはつながらなかった」といった理由があげられた。

- 家庭との面談、本人との面談等により、外部機関とつなぐまでの事態ではないと判断している。
- 重いケースではないと判断している。
- 病気である母親の症状は外で仕事ができるほどまで回復しており、お子さんが家事のために疲弊する様子も見られないため。
- 母が自分で対応すると聞いているため。
- 不登校としての対応をしている。
  
- 児童虐待等の件で子ども家庭支援センターや児童相談所につながっている。
- すでに子ども家庭支援センターにつながっているため。
  
- 以前に子ども家庭支援センターにつないだことがあるが、支援を拒否された家庭のため経過をみている。
- 日本語教室や交流協会等紹介しているが、つながっている様子がない。

### ◆対応方法（自由回答）

- ・対応方法については、「本人への声かけ」、「本人や家族との面談」、「相談対応」、「訪問」などのほか、必要に応じて「子ども家庭支援センターへ報告」していることがあげられた。

<ul style="list-style-type: none"> <li>- 本人との定期的な面談、本人の様子確認など。</li> <li>- 状況把握のため、相談の機会を定期的に設けている。</li> <li>- 教職員の見守りと定期的な声掛け。</li> <li>- 教員、職員で行事や持ち物等をわかりやすく説明している。</li> <li>- 母親やお子さんから相談があった時は、担任や管理職が相談にのることにしている（現在、定例の個人面談以外で特別な相談は受けていない）。</li> <li>- 本人と現在の状況話し合っている。母と連絡を取っている。本人と母親に担任や養護教諭が連絡を取っている。</li> <li>- 可能な限りの担任による訪問。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>- 子どもの様子を見たり、話を聞いたりするなどして注意してみている。心配な状況があれば、よく話を聞き管理職へ報告する。保護者とも連絡を取る。小中学校で連携して状況を把握するなどしている。心配な状況があれば子ども家庭支援センターへ報告する。</li> <li>- 毎月、児童の様子を子ども家庭支援センターに報告している。</li> </ul>

### ⑥ ヤングケアラーの有無について「わからない」とした理由

- ・①において、校内にヤングケアラーと思われる（可能性も含めて）子どもがいるか聞いたところ「わからない」と回答した16校に、その理由を聞いたところ、16校すべてが「家庭内のことで問題が表に出にくく、実態の把握が難しい」をあげていた。次いで半数が「ヤングケアラーである子ども自身やその家族が『ヤングケアラー』という問題を認識していない」をあげていた。

図表 2-4-15 「わからない」と回答した理由（複数回答）

	回答数	%
学校において、「ヤングケアラー」の概念や支援対象としての認識が不足している	2	12.5
不登校やいじめなどに比べ緊急度が低いいため、「ヤングケアラー」に関する実態の把握が後回しになる	3	18.8
家族内のことで問題が表に出にくく、実態の把握が難しい	16	100.0
ヤングケアラーである子ども自身やその家族が「ヤングケアラー」という問題を認識していない	8	50.0
その他	0	0.0
合計	16	100.0

### (3) ヤングケアラーの把握や支援にあたっての課題

#### ◆ヤングケアラーの把握や支援にあたっての工夫点、注意点等（自由回答）

- ・工夫点や注意点としては、「子どもの観察、変化のキャッチ」や「定期的な相談機会の設定」、「校内の情報共有」、「外部機関へのつなぎ」などがあげられた。

#### ● 子どもの観察、変化のキャッチ

- こまめな声をかける。道具や提出物について、寛大に待つ。代わりに用意することもある。
- 生徒の様子を観察すること。生徒の変化にいち早く気づくようにする。生徒と担任、学年教員との会話を大切にすること。SC との面談をさせ、困ったときの相談窓口を増やすこと。
- 教室では話しにくい家庭の内容も、スクールカウンセラーなどと個別に継続相談できるようにしている。保護者が病気などの情報がある児童には個別に声掛けや観察をして、気になることがあれば組織で対応していく。
- 児童の様子を毎日こまかく観察し、変化がみられる場合は個別に声をかける。
- 子供たちの言葉や立ち居振る舞い等に気を付けて、見ていく。疑わしい場合は、情報共有を校内で行い対応する。
- 休みがちになったり、遅刻などが増えたときには、その理由を確認するようにしている。
- 常に生徒の変容に対して教職員全体で高い意識を持って生徒に関わっている。
- 登校できている生徒には話をしやすい環境で状況を聞くようにしている。
- 毎日の出欠席の確認、毎朝の健康観察、提出物状況の確認。
- 生徒の服装、提出物の状況、民生委員の情報。
- 学校生活での様子を観察する中で、表情が暗かったりする場合には、生徒との二者面談を行うようにしている。学力が急に低下したときなどは、面談を実施している。

#### ● 定期的な相談機会の設定

- 年二回の全校教育相談の実施。
- 相談の機会を定期的に設けること。
- 5年生の全員面談等、家庭の状況も含め、個別に児童が相談できる機会を設けている。

#### ● 校内の情報共有

- 情報を共有する。
- 日常の会話や、生活の様子から気になることがあればまず学年で共有し、必要に応じて校内委員会や生活指導部会に共有する。教科担任や部活動顧問との情報共有も行っている。
- 教職員や地域の方からのちょっとした気付きを校内全体で共有して、把握や支援を進めるようにしている。
- 情報の共有と、日頃から子供の様子や身なりなど、ささいな変化も見逃さないように気を付けている。また、学年が変わっても情報の引継ぎを確実に行うことや、面談等を通して家庭の状況の把握に努めている。
- 担任以外の教員やカウンセラーも日頃からコミュニケーションをとり、情報を集めやすくしている。
- 正確な生徒情報の共有。生徒からの情報には傾聴するが、保護者にも必ず確認をする。カウンセラーと密に連携し、疑わしい件に関しては、調査をし、外部機関に動いてもらう。

#### ● 外部機関へのつなぎ

- 子ども家庭支援センターや学校医など関係機関と連携して家庭の状況を把握する。長期休業前後の声掛け、相談先一覧の配布など、困ったときに適切な相談機関へヘルプが出せるように支援していく。

## ◆ヤングケアラーの把握や支援にあたって難しいと感じる点（自由回答）

- ・把握や支援にあたって難しいと感じる点については、「子ども自身や家庭の理解不足、家庭への介入のしづらさ」やヤングケアラーかどうかの「把握が困難」であること、「外部機関・関係機関との連携の必要性」に関することがあげられた。

### ● 子ども自身や家庭の理解不足、家庭への介入のしづらさ

- 家庭への踏み込みが難しい。学校としてどこまでできるのか。
- 単に家族の一員としてのお手伝いと考えられる場合がある。
- 家事手伝いとの違いを見極めることが困難である。
- お手伝いや母子家庭で必要な家事とヤングケアラー線引き。
- 家庭に必要以上に入り込めないこと。保護者との関係が悪化することで、不登校に繋がると支援が全くできなくなってしまう。
- 人それぞれ気付く感度が異なること。支援するにあたって、家庭に踏み込むことへの反発があること。
- 家庭内の事情について、学校が踏み込みづらい。
- 家庭のできごとのため、踏み込めないことがある。家庭状況があるため、事情を聴き見守る対応までになってしまう。
- 保護者が支援を望んでいなかったり、意図的に支援を拒む場合。
- 親が家庭状況を隠す（正直に言わない）。
- 家庭方針や各家庭ごとに背景や状況が異なるため、判断しづらい部分がある。
- 本人の気持ちの不安定さの原因が家庭にあると認識していない。

### ● 把握が困難

- 生徒本人が隠したがること。本当のことを言わないことがある。
- 学校に登校しているだけでは、把握しづらい面がある。
- 子供の姿からだけでは、家庭の状況がわからず、どのような状態なのか把握することが難しい。いろいろな情報から推測して判断するしかできないのが現状である。また、外部の機関とつないでよいのか、判断が難しい。
- スクリーニングをしていないので、児童が話してくれないと実態がつかめない。
- 保護者の認識が甘く、自己都合により、状況の把握が困難な家庭がある。
- 家庭環境が見えない。本人も気づいていない。

### ● 外部機関・関係機関との連携の必要性

- 子どもや家庭が支援を求められない場合に把握しにくいこともある。また保護者の精神疾患等で連携が難しいこともある。困っている家庭ほど、支援を求められないことや拒否されることもある。保護者を指導して改善されることは難しく、具体的な支援や福祉が必要である。子ども家庭支援センターやスクールソーシャルワーカー、主治医など関係機関と連携した対応が必要で、具体的な支援や福祉につないでくれることが必要になると思います。
- 生徒の訴えを行政、特に子ども家庭支援センターが受け止めず、対応に時間がかかる。

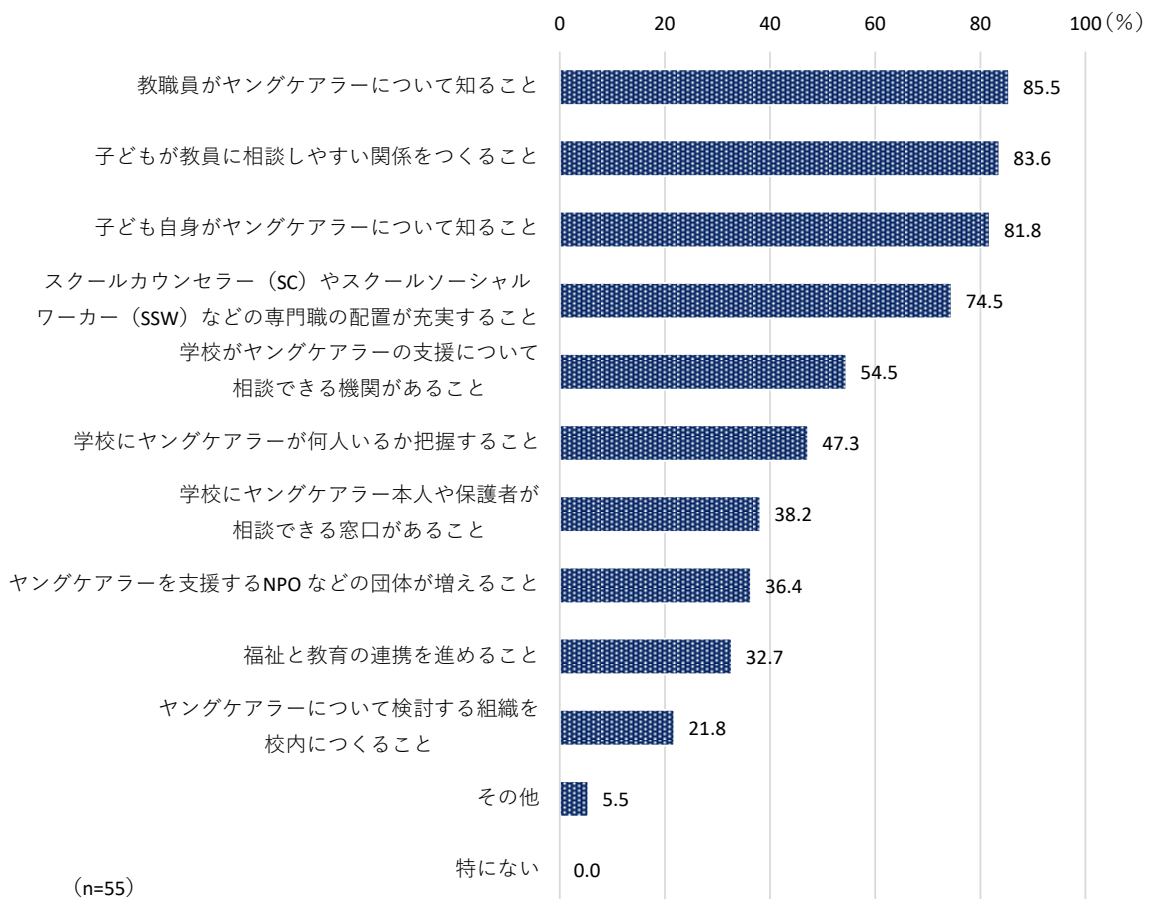


## 5. 今後のヤングケアラー支援拡充に向けて

### (1) ヤングケアラーを支援するために必要なこと

- ・ヤングケアラーを支援するために必要だと思うこととしては、「教職員がヤングケアラーについて知ること」(85.5%)や「子ども自身がヤングケアラーについて知ること」(81.8%)といった、ヤングケアラーの普及啓発や理解促進に関する点が多くあげられた。さらに、「子どもが教員に相談しやすい関係をつくること」(83.6%)や「スクールカウンセラー（SC）やスクールソーシャルワーカー（SSW）などの専門職の配置が充実すること」(74.5%) など、相談しやすい関係性の構築や支援体制づくりに関する点が多くあげられた。

図表 2-5-1 ヤングケアラーを支援するために必要なこと（複数回答）



#### 【「その他」の自由回答】

- 家庭のことについて学校がどこまで踏み込めるのか明確になると良い。
- 行政対応が必要。
- 家庭環境を確認しに行ける教職員がいること、またはその時間の確保。

#### ◆「福祉と教育の連携を進めること」の具体的意見（自由回答）

- ・上記において選択肢「福祉と教育の連携を進めること」に関して、具体的な内容を聞いた。自由回答からは、福祉・教育関係者間の「情報共有」や役割分担を明確にした福祉・教育関係者間の「支援体制の構築」に関することがあげられた。

##### ● 情報共有

- 情報連携で児童の家庭の状況を把握する。役割分担をして対応する。具体的な福祉や支援につないでもらう。
- 例えば、学校から子ども家庭支援センターへ毎月の出欠状況をお知らせしているが、それらの家庭に対する支援状況等の様子については、支援を終了するときにしか学校に報告がない。どのような支援をしているのか、状況としてどうなのか福祉側の対応も定期的に報告されるシステムが出来上がるとよい。
- 生活保護世帯であるとか、家族が福祉関係機関で特別なケアを受けていて、児童の日常生活に影響を及ぼす可能性があるケースなどの日常的な情報共有。
- 学校で把握したり、相談を受けたりした時、福祉など外部機関へのスムーズなつながりや支援策が学校でもわかるとよい。
- 本校でも家庭に課題のある家庭は複数見られる。そういう家庭に対して、福祉がどのような支援ができるのか、又は実際に行っているのか等の情報共有をさらに深めていく必要があると考える。
- 実態を把握するのに、地域の福祉団体と情報を共有すること。または、情報をいかに得るかを考えること。

##### ● 支援体制の構築

- 地域の丁寧な見守り、支援体制の構築ができるとよい。
- 家庭の福祉的な対応を専門に行う部署をエリアに一つ程度作れると良い。
- 「仕事が忙しいから」等の理由で、子供の具合が悪くても迎えに来ない保護者はいる。ヤングケアラーの問題も含め、学校の中に福祉部門の職員を入れておく必要がある。教員が教育も福祉も担うのは困難である。
- 学校だけでは対応できないので関係機関と連携を深める必要があるから。
- 学校が気軽に相談できるようなスタイルをつくってほしい。
- 保護者を支援するところをつなげていく。
- 子ども家庭支援センターとの連携。
- 家庭に入れるのは、福祉の方が確実なので、つながりが欲しいが、学校を利用する人もいるので、そこが難しい。
- 学校と福祉の役割を明確にして対応する。

## (2) 学校におけるヤングケアラーへの対応等について

- ・学校におけるヤングケアラーへの対応等に関して意見を聞いたところ、『『ヤングケアラー』と『手伝い』の線引きの難しさ』や「ヤングケアラーと思われる子どもの状況把握の難しさ」があげられた。また、ヤングケアラーと思われるこどもの早期発見・把握のための「教職員のさらなる研修・学び」があげられた。他方で、「教職員による対応の限界」を指摘する声もあり、それに対して役割分担を明確にしたうえで「関係機関との連携・協力による支援体制の構築」が求められている。

### ● 「ヤングケアラー」と「手伝い」の線引きの難しさ

- 家のお手伝いと、ヤングケアラーの境界線について、線引きが難しいことが可能性としてあると思います。そのため、判断に迷うことがあります。
- 教職員のヤングケアラーに関する認識は高まりつつあるが、どこからがヤングケアラーに該当するのか、線引きが曖昧な気がする。家族として弟妹の面倒をみたり、家事手伝いをしたりすることは家族の一員であるので当然のことだと考えるが、どの程度負担になったらヤングケアラーとなるのか、また人によって負担感は異なるので、線引きすること自体が、危険性を孕むと感じる。
- 質問の言葉を職員室で教員と確認した際、ちょっとしたお手伝いも「お世話」と良い意味で回答する子供がいるのではないかと話しています。子供の心配な行動には担任たちが原因や背景を探り、改善に向けて迅速に対応している。家庭内のことは真実が見えてこないことが多くあると思うが、教育機関の役割、福祉的機関の役割、担う施設を明確に示していくことで、救えるケースが増えていくことを期待している。

### ● ヤングケアラーと思われる子どもの状況把握の難しさ

- 子ども自身も家族として当然と思っていることもあり、他人に話すことはあまりなく、学校で把握することは難しい。また把握しても対応をどうするか迷い、相談機関も少ない。子供が相談できる場所とその雰囲気作りをすることも、学校としてできることである。子供たちは「ヤングケアラー」というレッテルを貼られることへも抵抗があると思うので、相談や話を聞いた大人側の心構えも重要だと思う。
- 保護者に対する周知がまずは必要。家のために働くことが当然と考える方がまだいる。
- 家庭の状況について、どこまで踏み込んで考えていけるか、また、子供が困ったときに相談できる体制について今後とも考えていきたい。
- 家庭でのことであるため、状況を把握するのは難しい。子供たち保護者が相談できる機関があると学校も把握しやすい。
- 家庭の内部のことであることから、実情を把握するのが大変難しい事柄だと思う。保護者が周囲に相談しやすい、環境づくりも大きいと感じる。
- 常に児童の情報を共有し、適切な対応ができるとよい。
- 今回のような調査を通して、ヤングケアラーに該当する児童がいるのかどうかを学校がきちんと把握していく必要があると感じている。家庭の様子を学校がすべて把握するのは難しい点もるので、児童に対する理解・啓発をすすめることで、児童自身がSOSを出せるような体制を整えていくことが大切だと思う。
- 気になる生徒がいた場合の情報収集の難しさを感じる。生徒が話してくれるとは限らない。教員が保護者に質問したりすることは困難。関係機関に家庭に入り込んでいただく制度ができることを望みます。
- 正直、実態が不明である。今回の調査の結果を学校も共有させてほしい。

- 見えない部分があり、把握が難しい。先日のアンケートも、学校側が結果を見られるようになると思う。

### ● 教職員のさらなる研修・学び

- 学校におけるヤングケアラーの早期発見・把握のためには、教職員一人一人がヤングケアラーに対する理解していく必要があると感じている。ヤングケアラーはもちろんのこと、それ以外でも日頃からの子どもの様子をしっかりと把握していくことが大切だと感じている。
- 学びたいのに、自由な時間がほしいのに、不憫な思いをしている児童がいる。目を背けてはいけない。もっとこの問題に、正体し、学ばないといけない。
- 事例をあげての説明や資料提供などがあるとよい。
- ヤングケアラーについて、これからも研修等を通して、更に理解を深めていくことが大切であるとする。また、家庭の状況をどう把握していくか、そしてどのように外部機関とつないでいくか、校内体制も整える必要があると感じている。
- 生活指導主任会等を利用し、対応方法等や相談機関を周知する機会がほしい。
- 家庭内のことで表面化していないものがあるかもしれないという認識をもち、生徒とのコミュニケーションを円滑に図って小さな変化をつかみ取るようにしたい。該当する生徒がいた場合は、話をよく聞き生徒の気持ちを和らげたり、関係機関との連携を図ったりといった働きかけをしていきたい。

### ● 教職員による対応の限界

- 福祉が学校に入り込みすぎると、本来の教育活動が危うくなる。難しい。
- ヤングケアラーの問題や虐待の問題は、専門的な知識と、対処するための経験が必要である。世代交代が進み若い教員が多い中で、その役割を教員が担うのはとても困難である。子供たちとじかに接するフロントラインとしての学校の重要性はわかるが、専門的な内容は教員では対応しきれない。
- この問題に限らず、時間的、精神的に余裕を持って対応できるよう、働き方改革が必要。
- 何でも学校にやってもらおうとする社会情勢は何とかならないものか。
- 家庭内の調整にはスクールソーシャルワーカーが適任である。スクールソーシャルワーカーの待遇を改善し、増員を図ることが望ましい。
- 最近では、年度初めに担任が生徒の家庭を訪問することはなくなり、保護者も遠慮する傾向がある。その結果、生徒の生活環境を確認する機会がない。教職員の代わりに家庭の様子を確認できる職員がいると助かる。

### ● 関係機関との連携・協力による支援体制の構築

- 家族の病気や介護がある児童が相談できる自治体の窓口やシステムがあるとよい。学校だけでは把握や対応が困難なため、介護事業所や医療機関などが子ども家庭支援センターなどと連携して状況を把握し、家庭や子どもへの支援につなげられるとよい。
- 家庭内の実態が把握しにくい。地域の力も借りて情報収集しているが、十分かどうかわからない。共働き家庭が多く、家庭も忙しく、学校との連携が難しい家庭が増えている。今後関係諸機関とより一層連携して対応していく必要がある。
- 家庭への支援そのものは福祉の分野であり、教育機関である学校ができることは「子供の観察からヤングケアラーを発見する」「子供への聞き取りから家庭の状況を把握し、関係機関に情報提供する」「子供の相談相手になって、学習保障や心のケアをする」等といった対応です。学校が本来の役割を超えて無理に対応しても、よい結果に結びつきません。福祉機関がセンター機能を果たし、学校は後方支援をするよう、役割分担をして連携することが、効果的であると考えます。
- 気付きや報告等を行うことは、子供たちのために必要だと考える。そして、子供たちのためにということで、学校で支援していることをもっと福祉の方々が対応できるよう、専門職の

増員やかかわり方の改善等を検討していただけるとよい。

- 家庭訪問が廃止され、個人情報保護が厳密に求められる現在において、家庭として知られたくない事情について学校が把握することは、容易ではなく、学校にのみ、その任と責を担わされては、これまでの任務に加え、さらに業務がまた増えてしまう。新設された子ども家庭庁の新設部署の体制や対応にも注視し、福祉も含めた行政機関や子供食堂等地域の方や施設とも連携し、各家庭に任されるのではない「社会全体で対応する」1つの関係機関として、学校現場も対応していくべきであると考えます。
- 学校（教員）が家庭（生徒、保護者）にできることには限界があり、専門機関あるいは行政が対応できるように整備していただきたい。



## Ⅲ. 高齢・障害関係の事業所向けアンケート調査

### 1. 調査実施概要

#### ◆調査のねらい

- ・杉並区におけるヤングケアラー支援強化に向けて、日ごろから子どもたちやその家族と密接に関わりを持つ医療福祉関係職のヤングケアラーに対する認識や対応について実態を把握するとともに、今後の支援の方向性等についての認識・意向を把握する。

#### ◆調査対象

- ・福祉・介護等に関わる下記関係事業所に所属している職員（計約 213 事業所、約 620 名）
- ・回答者としては、下記事業所の、管理・総務ご担当、相談・計画等策定ご担当、ケア、リハビリ等の直接サービス提供ご担当者を想定

杉並区障害者地域相談支援センターすまいる	3 事業所	約 30 名
特定相談支援事業所	40 事業所	約 50 名
地域包括支援センター（ケア 24）	20 事業所	約 140 名
区内介護支援事業所	約 150 事業所	約 400 名
計	約 213 事業所	約 620 名

#### ◆回答方法

- ・パソコンやタブレット端末等を使用して、WEB アンケート票にアクセスして回答した。
- ・設問は、チェックボックスにて選択肢を選ぶ設問、数字や具体的な内容を入力いただく設問から構成した。

#### ◆調査期間

- ・令和 5 年 7 月 18 日～8 月 4 日

## 2. 基本情報（事業所・回答者）

### （1）所属している事業所

#### ① 事業所の種類

- ・回答は、対象となった事業所全体（計約 620 名）の 21.1%にあたる 131 名から寄せられた。
- ・事業所の種類別にみた回収率は下表のとおりである。回収率が最も高かったのは「地域包括支援センター(ケア 24)」で 70 名(50.0%)、「区内介護支援事業所」は 31 名(7.8%)にとどまった。

図表 3-2-1 事業所の種類

	回答数	構成比(%)	対象数	回収率(%)
杉並区障害者地域相談支援センターすまいる	12	9.2	30	40.0
特定相談支援事業所	18	13.7	50	36.0
地域包括支援センター(ケア24)	70	53.4	140	50.0
区内介護支援事業所	31	23.7	400	7.8
合計	131	100.0	620	21.1

※なお、本調査報告では、事業所種別の特徴や差を見るために、事業所種別によるクロス集計を行った。クロス集計にあたっては、「杉並区障害者地域相談支援センターすまいる」（12 名）と「特定相談支援事業所」（18 名）を合わせて 1 つの分析軸とし（次頁以降のクロスに際しての表現としては、「すまいる & 特定相談」と表記）、計 3 つの分析軸として再設定した。

#### ② 事業所の所在地

- ・事業所所在地は、下表のとおりである。

図表 3-2-2 事業所の所在地

	回答数	%
井草地域	14	10.7
西荻地域	19	14.5
荻窪地域	30	22.9
阿佐ヶ谷地域	15	11.5
高円寺地域	19	14.5
高井戸地域	22	16.8
方南・和泉地域	12	9.2
合計	131	100.0



## (2) 回答者の属性

### ① 現在、従事している仕事の内容

- ・現在、回答者が事業所で従事している仕事の内容をみると、全体では「相談・計画策定」が85.5%と大半を占める。

図表 3-2-3 回答者が従事している仕事

	回答数	%
管理・総務	15	11.5
相談・計画等策定	112	85.5
ケア、リハビリ等の直接サービス提供	4	3.1
その他	0	0.0
合計	131	100.0

### ② 当該事業所での勤務年数

- ・全体では、「3年未満」と「5～8年未満」がそれぞれ29.0%と多く、次いで「10年以上」が20.6%である。平均勤務年数は、5.8年であった。
- ・事業所種別にみると、介護支援事業所では平均勤務年数が7.5年と長い。

図表 3-2-4 当該事業所での勤務年数

	回答数	%
3年未満	38	29.0
3～5年未満	20	15.3
5～8年未満	38	29.0
8～10年未満	8	6.1
10年以上	27	20.6
合計	131	100.0

#### 平均勤務年数（事業所種別）

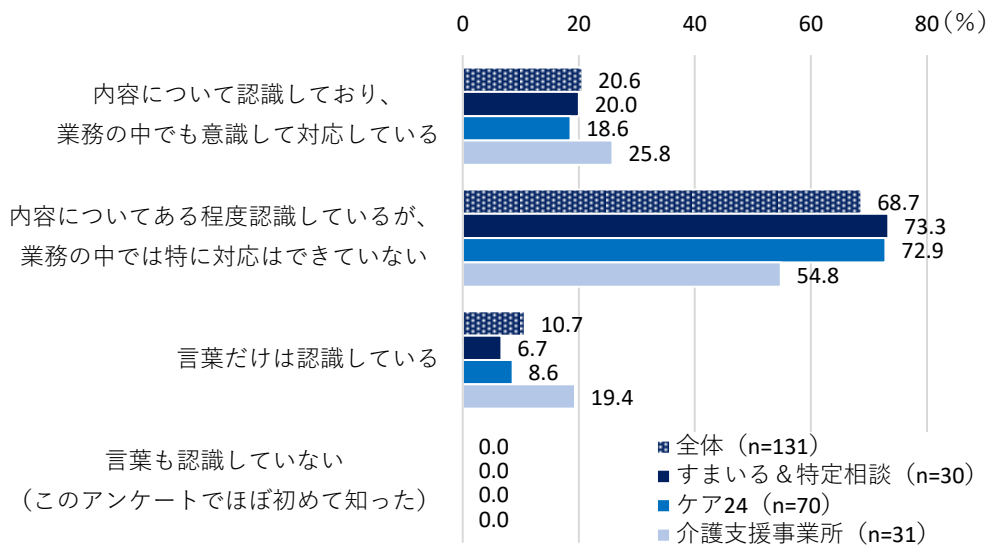
すまいる & 特定相談	5.4 年
地域包括支援センター（ケア 24）	5.3 年
区内介護支援事業所	7.5 年

### 3. ヤングケアラーと思われる子どもとの関り・支援の実績

#### (1) 「ヤングケアラー」に関する認識

- ・「ヤングケアラー」についての認識や関りについて4段階で聞いたところ、全体では「内容について認識しており、業務の中でも意識して対応している」が20.6%、「内容についてもある程度認識しているが、業務の中では特に対応できていない」が68.7%で、合わせて9割弱の回答者が「(ある程度) 認識している」と回答していた。
- ・事業所種別では、介護支援事業所は「内容について理解していて、業務の中でも意識して対応している」とする回答が25.8%と、他の種別に比べ5~7ポイント高くなっている一方で、他の事業所種別と比べて「言葉だけは認識している」とする回答も19.6%と高く、同じ種別の事業所においても差があることが推察される。

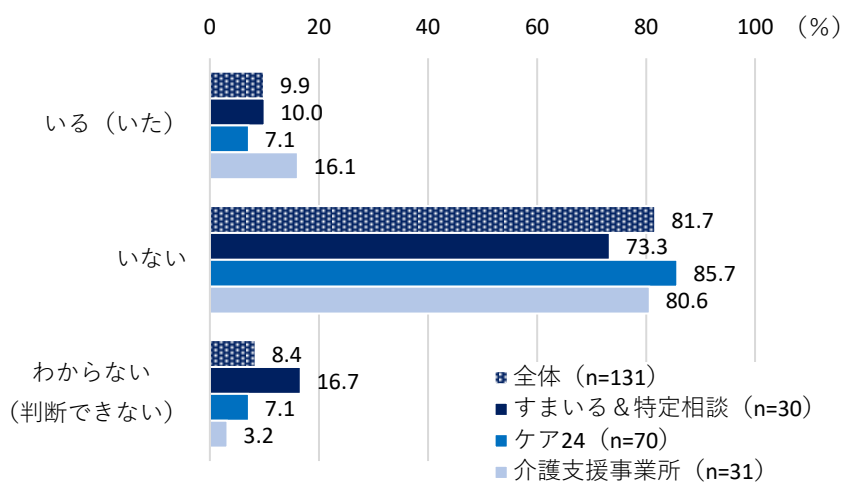
図表 3-3-1 「ヤングケアラー」に関する認識



## (2) ヤングケアラーと思われる子どもの有無

- ・過去1年間のヤングケアラーと思われる(可能性も含む)子どもの有無について聞いたところ、全体では「いる(いた)」が9.9%、「わからない(判断できない)」が8.4%、「いない」が81.7%だった。
- ・事業所種別では、「いる(いた)」とする回答は、介護支援事業所で16.1%と高い。一方、すまいる&特定相談では、「わからない(判断できない)」が16.7%と他の種別に比べて高くなっている。

図表 3-3-2 ヤングケアラーと思われる子どもの有無



### (3) ヤングケアラーとの関り・支援の実績

- ・ヤングケアラーと思われる子どもが「いる (いた)」と回答した 13 名に対して、ヤングケアラーと思われる子どもと判断した理由や発見したきっかけ、その後の対応等について確認した。

※13名の所属する事業所の内訳は、すまいる&特定相談が3名、地域包括支援センター(ケア24)が5名、介護支援事業所が5名である。

#### ① ヤングケアラーの判断方法

- ・ヤングケアラーと思われる子どもの具体的な判断方法を聞いたところ、「関係機関や関係団体からの報告・指摘で『ヤングケアラー』として対応」(6名、46.2%)、「事業所の中でケース会議や検討を行って判断」(5名、38.5%)、「アセスメントシートやチェックリストなどのツールを用いて」(3名、23.1%)の順であった。
- ・「その他」の具体的内容としては、「親からの聞き取り」、「訪問時に気づいた」などがあげられた。

図表 3-3-3 ヤングケアラーの判断方法 (複数回答)

	回答数	%
事業所の中でケース会議や検討を行って判断	5	38.5
関係機関や関係団体からの報告・指摘で「ヤングケアラー」として対応	6	46.2
アセスメントシートやチェックリストなどのツールを用いて	3	23.1
その他	3	23.1
合計	13	100.0

#### ② ヤングケアラーに該当すると思われる子どもの数

- ・13名からあげられた、ヤングケアラーに該当すると思われる子どもの数は、小学校低学年6名、小学校高学年6名、中学生9名、高校生12名の合計33名であった。

図表 3-3-4 ヤングケアラーの数

	合計
小学校低学年	6
小学校高学年	6
中学生	9
高校生	12
合計	33
回答数	13

### ③ ヤングケアラーと思われる子どもに気づいたきっかけ

- ・気づいたきっかけとして最も多かったのは、「支援業務の中で家族・親戚などの話から気づいた」が8名（61.5%）、次いで「行政や関係機関・関係者からの話で気づいた」が5名（38.5%）、「子ども本人の話から」が3名（23.1%）であった。
- ・「その他」としては、「サービス提供事業所の通報」があげられた。

図表 3-3-5 気づいたきっかけ（複数回答）

	回答数	%
子ども本人の話から	3	23.1
近隣住民からの情報	1	7.7
支援業務の中で家族・親戚などの話から気づいた	8	61.5
行政や関係機関・関係者からの話で気づいた	5	38.5
その他	1	7.7
合計	13	100.0

- ・上記の「行政や関係機関・関係者からの話で気づいた」5名に対して、具体的な関係機関を聞いたところ、「区の高齢福祉部門」が2名、「区の障害福祉部門」、「他の介護保険サービス事業所」、「子ども家庭支援センター」、「児童相談所」が、それぞれ1名からあげられた。

図表 3-3-6 関係機関・関係者（複数回答）

	回答数	%
区の要保護児童対策地域協議会	0	0.0
区の障害福祉部門	1	20.0
区の高齢福祉部門	2	40.0
他の障害福祉サービス事業所等	0	0.0
他の介護保険サービス事業所	1	20.0
他の子育て支援施設	0	0.0
教育委員会	0	0.0
小学校	0	0.0
中学校	0	0.0
SSW・SC（スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー）	0	0.0
済美教育センター	0	0.0
児童発達支援センター	0	0.0
民生・児童委員	0	0.0
子ども家庭支援センター	1	20.0
児童相談所	1	20.0
医療機関	0	0.0
警察	0	0.0
子ども食堂	0	0.0
保健センター	0	0.0
地域包括支援センター	0	0.0
その他	0	0.0
合計	5	100.0

#### ④ 子ども家庭支援センターや関係機関への連絡等

- ・ヤングケアラーと思われる（可能性のある）子どもに気づいたときの、区の子ども家庭支援センターや関係機関との連携方法については、「気づいた時点で、すべてのケースについて、連絡・報告」は4名（33.3%）、「事業所内での検討ののち、ヤングケアラーの可能性が高い場合にのみ報告」が2名（16.7%）、残り5名（41.7%）は「特にルール化していない（確認事項等あれば連絡）」であった。「その他（具体的な記載はなし）」が1名であった。

図表 3-3-7 子ども家庭支援センターや関係機関への連絡等

	回答数	%
気づいた時点で、すべてのケースについて、連絡・報告	4	33.3
事業所内での検討ののち、ヤングケアラーの可能性が高い場合にのみ報告	2	16.7
特にルール化していない（確認事項等あれば連絡）	5	41.7
その他	1	8.3
合計	12	100.0

#### ⑤ ケース対応

##### ◆ケース数

- ・ヤングケアラーと思われる（可能性のある）子どものケース対応について、回答のあった10名の対応をみると、「他機関につないだケース」（があった）は4ケースで、「事業所内で対応したケース」（があった）は9ケース、「特に対応の必要がなかったケース」は5ケースであった。

図表 3-3-8 ケース数

	合計
他機関につないだケース	4
事業所内で対応したケース	9
特に対応の必要がなかったケース	5
回答数	10

◆他機関のつなぎ先（「他機関につないだケース」が1件以上）

- ・「他機関につないだケース」（があった）4名に、具体的なつなぎ先を確認した。つなぎ先として、「子ども家庭センター」が3名、「区の高齢福祉部門」、「医療機関」、「保健センター」をあげたのが、各1名であった。

図表 3-3-9 つなぎ先（複数回答）

	回答数	%
区の要保護児童対策地域協議会	0	0.0
区の障害福祉部門	0	0.0
区の高齢福祉部門	1	25.0
他の障害福祉サービス事業所等	0	0.0
他の介護保険サービス事業所	0	0.0
他の子育て支援施設	0	0.0
教育委員会	0	0.0
小学校	0	0.0
中学校	0	0.0
SSW・SC（スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー）	0	0.0
済美教育センター	0	0.0
児童発達支援センター	0	0.0
民生・児童委員	0	0.0
子ども家庭支援センター	3	75.0
児童相談所	0	0.0
医療機関	1	25.0
警察	0	0.0
子ども食堂	0	0.0
保健センター	1	25.0
地域包括支援センター	0	0.0
その他	0	0.0
合計	4	100.0

◆つないだ後のフォロー（「他機関につないだケース」が1件以上）

- ・「他機関につないだケース」（があった）4名に、つないだ後のフォロー状況を確認した。  
「原則すべてのケースについて引き続き情報を共有している」が3名、「ケースの内容によって、まちまち」が1名であった。

図表 3-3-10 外部機関につないだ後のフォロー状況

	回答数	%
原則すべてのケースについて引き続き情報を共有している	3	75.0
原則一旦つないで、その後は情報共用を図っていない	0	0.0
ケースの内容によって、まちまち	1	25.0
合計	4	100.0

◆他機関につながなかった理由（「他機関につないだケース」が0件）

- ・「他機関につないだケース」がなかった方に、つながなかった理由を確認した。該当する6名の回答は、「自機関で対応可能だった（つなぐ必要がなかった）」が2名、「どこにつなぐのが適切かわからなかった」が1名であった。「その他」として、4名から下記があげられた。

図表 3-3-11 外部機関につながなかった理由（複数回答）

	回答数	%
自機関で対応可能だった（つなぐ必要がなかった）	2	33.3
どこにつなぐのが適切かわからなかった	1	16.7
その他	4	66.7
合計	6	100.0

【「その他」の自由回答】

- 1ヶ月後に祖母が施設入所し介護の必要がなくなった。
- 繋いだが受けてもらえなかった。
- 他機関からこちらに繋がれたケースであった。
- 既に子家センが介入済だった。

※自由回答については一部を紹介する。内容が重複している意見及び同様の意見は省略している。必ずしも原文のままではないが、なるべく回答者の表現を用いる形で記載している（以下同様）。



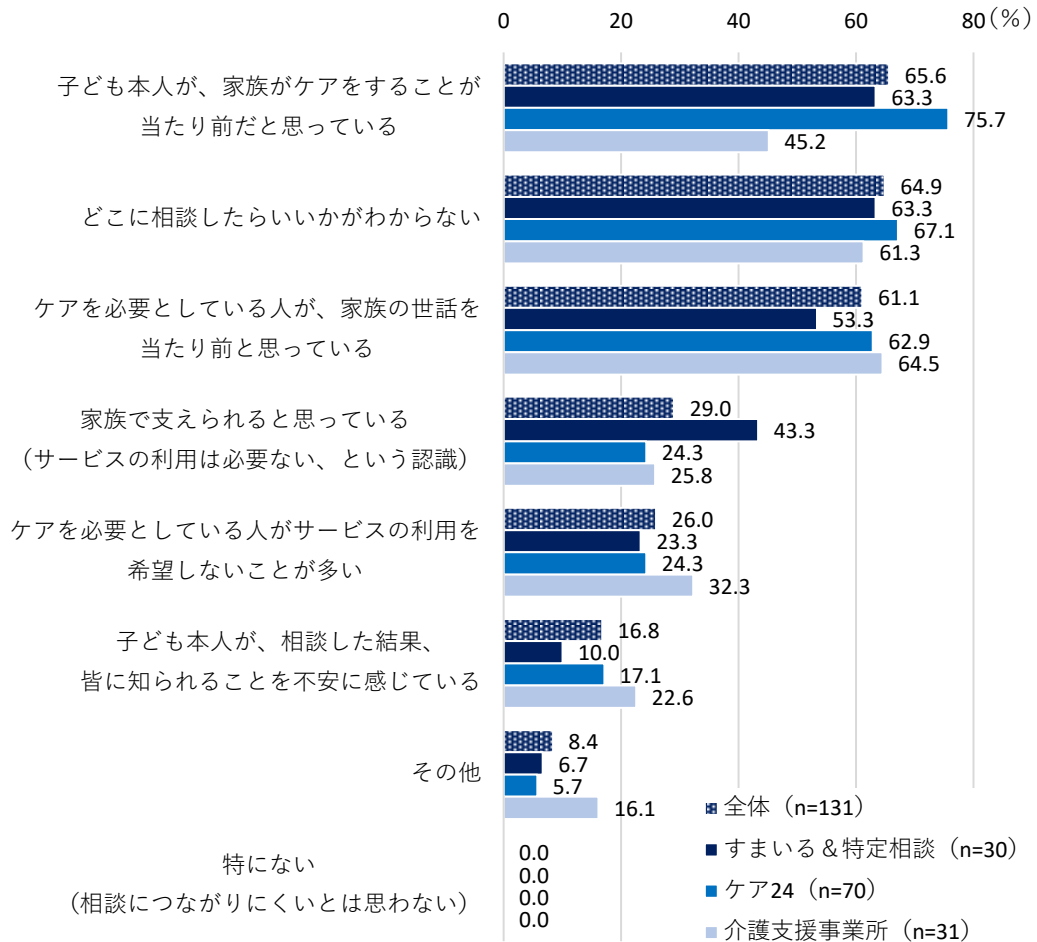
## 4. 今後のヤングケアラー支援拡充に向けて

---

### (1) 相談につながりにくい理由

- ・ヤングケアラーについて相談につながりにくい理由を上位3つまであげてもらった。「特にない（相談につながりにくいとは思わない）」とする回答は0件であったことから、すべての回答者が、何らかの相談につながりにくい理由があると感じていることが明らかとなった。
- ・相談につながりにくい理由として6割以上の回答者が指摘したのは、子ども本人、ケアを必要としている人双方の認識の問題と、相談先が不明確な点である。具体的には「子ども本人が、家族がケアをすることが当たり前だと思っている」が65.6%、「どこに相談したらいいかがわからない」が64.9%、「ケアを必要としている人が、家族の世話を当たり前と思っている」が61.1%であった。
- ・次に、家族やケアを必要としている人の、サービスの利用についての必要性や希望についての認識や意向の弱さが2~3割指摘された。具体的には「家族で支えられると思っている（サービスの利用は必要ない、という認識）」が29.0%、「ケアを必要としている人がサービスの利用を希望しないことが多い」が26.0%であった。
- ・他方、「子ども本人が、相談した結果、皆に知られることを不安に感じている」も16.8%みられた。
- ・「その他」の回答としてあげられた具体的内容は、次頁のとおりである。本人の意識、家族の意識、経済的な理由、連携上の課題などの観点からの指摘がされている。
- ・事業所種別では、全体の回答で上位となった「どこに相談したらいいかがわからない」、「ケアを必要としている人が、家族の世話を当たり前と思っている」については、いずれの事業所種別でも高順位であった。全体回答で、第1位であった「子ども本人が、家族がケアをすることが当たり前だと思っている」は、介護支援事業所では、他に比べて20ポイント程度低く、第3位であった。

図表 3-4-1 相談につながりにくい理由（上位3つまで）



【「その他」の自由回答】

● 主に本人の意識

- 第三者に相談するという選択肢があることを知らない。
- 子ども本人が相談していいと思っていない。子どもが家族から他言しないように言われている。
- 相談しても代わりにやってくれる人は来ない。

● 主に家族の意識

- 家族・本人ともにケアをする、してもらうことについて特に抵抗を感じていないこと（当たり前という強い意味ではなく）。その段階からヤングケアラーに進展していく見極めが当事者・外部の支援者からも難しいと感じる。
- 主介護者は自身の介護方針とあわない、親族の介護者については不満を訴えるが、自身の指示通りに動いてくれる親族の介護者には不満を感じないので、相談として上がってこない。主介護者（配偶者や子供）が、孫や子供の子供が世話をしている事を伝えてくれないと、支援者は把握出来ない。
- 各項目すべてに対して「ケアラーが知らないでいるのが当たり前の世界」にいるものと想われる。

● **経済的な理由**

- 金銭的な問題から他の選択肢を選べない。
- お金がかかると思っている。
- 相談する時間的理由や介護・家事援助等サービスに必要な金銭的余裕がない境遇にある。

● **連携上の課題**

- 学校等の教育機関と連携が上手く取れない。

● **ケース・バイ・ケースという性格からくる判断の難しさ**

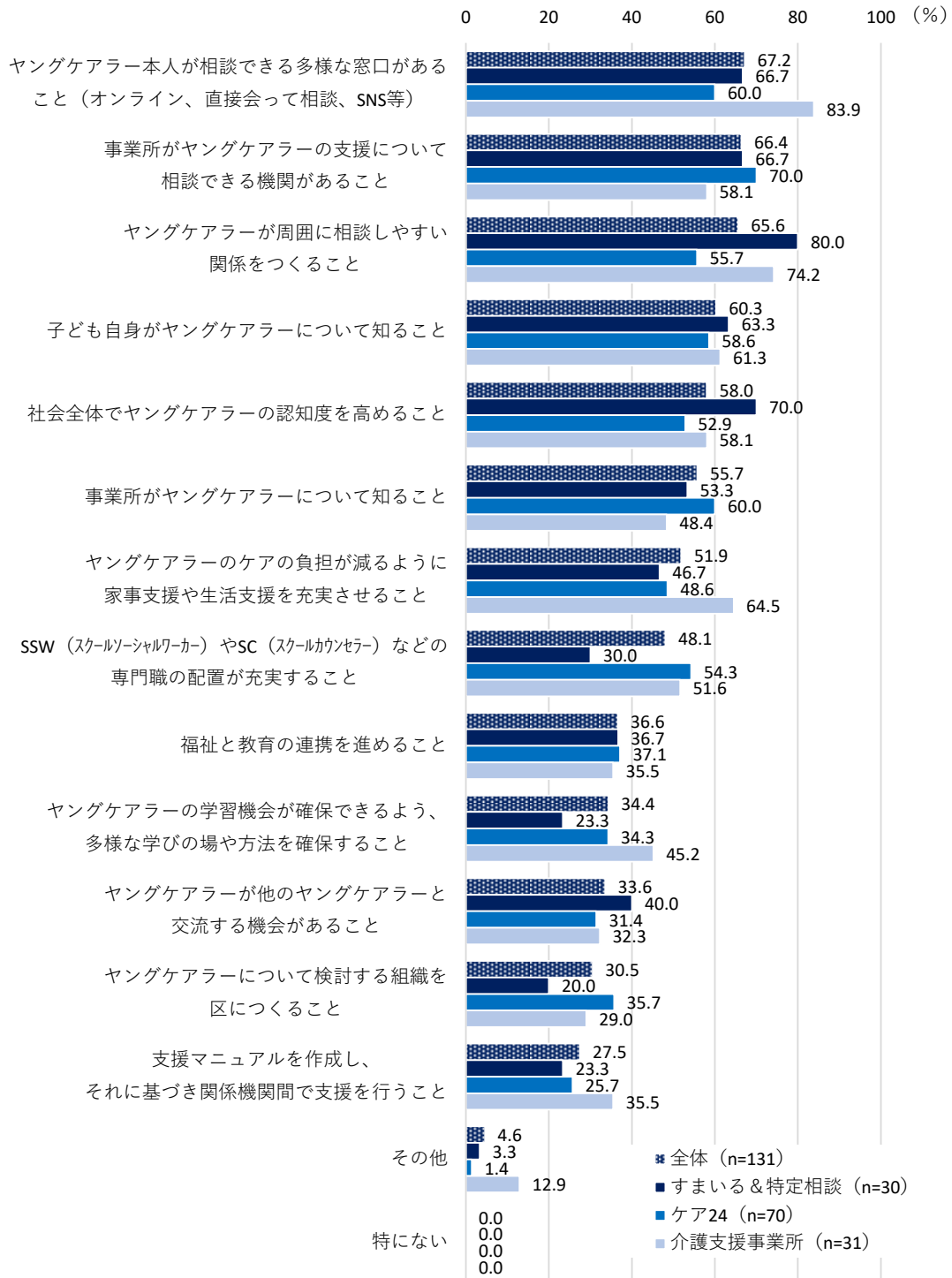
- 健常児でも親が短時間不在の時に兄弟を見守ったりする。頻度や見守る内容によると思う。

## (2) ヤングケアラーの支援のために今後必要なこと

### ① 支援のために、今後より必要だと思うこと

- ・ヤングケアラーの早期発見や支援のために、今後より必要だと思うことを複数回答であげてもらった。前問同様、「特にない」とする回答は0件であったことから、すべての回答者が、今後必要だと思う支援方策について回答していた。
- ・全体として、上位にあげられたのは、いずれも「相談」がキーワードとなっている。第1位はヤングケアラーが相談できる多様な窓口（オンライン、対面、SMS等）、第2位は事業所がヤングケアラーの支援について相談できる機関、第3位はヤングケアラーが周囲に相談しやすい関係づくりで、いずれも6割以上の回答率となっている。
- ・次のキーワードは「知る」あるいは「認知する」である。子ども自身、事業所がヤングケアラーについて「知ること」、社会全体がヤングケアラーについての認知度を高めることなどで、5～6割の回答を得た。
- ・上記以外では、ヤングケアラーへの直接的支援、環境整備等の具体的な支援方法について、約3割～5割の回答がみられた。
- ・なお、選択肢「福祉と教育の連携を進めること」を選んだ回答者に対して、具体的な内容を記載してもらったところ、教育を通じての（教員、子どもたち等の）学びの機会の確保、学校と地域との開かれた関係づくり、福祉と教育現場との情報共有の仕組みづくり、学校から適切な相談機関等へのつなぎ、福祉からの相談先の確保等の多様な観点から、多くの意見が寄せられた（具体的な意見はP.64～65参照）。

図表 3-4-2 今後より必要だと思うこと（複数回答）



## 【事業所種別】

- ・以下、事業所種別に、全体の傾向と比べて特徴的な点（事業所全体に比べ、10ポイント以上、高いあるいは低い項目）は、以下のとおりである。

### ◆スマイル&特定相談

#### （事業所全体に比べて高い項目）

ヤングケアラーが周囲に相談しやすい関係をつくること （80.0%）

社会全体でヤングケアラーの認知度を高めること （70.0%）

#### （事業所全体に比べて低い項目）

ヤングケアラーの学習機会が確保できるよう、多様な学びの場や方法を確保すること  
（23.3%）

SSW（スクールソーシャルワーカー）やSC（スクールカウンセラー）などの専門職の配置が充実すること （30.0%）

### ◆ケア24

#### （事業所全体に比べて低い項目）

ヤングケアラーが周囲に相談しやすい関係をつくること （55.7%）

### ◆介護支援事業所

#### （事業所全体に比べて高い項目）

ヤングケアラー本人が相談できる多様な窓口があること （83.9%）

ヤングケアラーのケアの負担が減るように家事支援や生活支援を充実させること  
（64.5%）

ヤングケアラーの学習機会が確保できるよう、多様な学びの場や方法を確保すること  
（45.2%）

## 【「その他」の自由回答】

- 高齢者介護の場面では、独居や老老介護の場面が多く、若者が関わる場面が少ない。障害者福祉の場面の方が、ヤングケアラーが多いのではないかな？
- 学校などの掲示板に簡単な分りやすい説明と連絡先を目の付くところに貼り出す。
- ケア会議の充実や既存のサービスでできないことを柔軟に対応してもよいような制度ができること。
- 家族が子どもに介護をしいてしまっていることに気づけるようにする。
- そもそも社会構造のゆがみから浮き彫りになってきた問題だと思うので社会構造改革が必要。

## 【「福祉と教育の連携を進めること」の自由回答】

### ● 教育を通じての（教員、子どもたち等の）学びの機会の確保

- 「教育」の場面で、「福祉」や「医療」という事について、そもそも学ぶ機会が少なく、基本的理解が進んでいないと思われる。
- 福祉とは子どもが幸せであることから始まるといっても過言ではない。そこをベースに子どもの権利についての学習機会を増やす。
- 中学でこういう支援があるという情報提供あるといい。小学生だとわかりにくいかもしれない。
- 義務教育時に授業等でヤングケアラーについて学ぶことで、子ども自身や教師で気づききっかけにする。また、教師への相談するきっかけにもなると考える。
- 現在の教育の現場における福祉の知識は限定的で、児童生徒自身に相談が必要という気づきになる授業内容ではない。実際の事例などで子供でも理解できる内容にして行く必要がある。また、現場の教師や関係者がヤングケアラーだと気づいても相談までに至らないケースは多々あると予測する。気軽に相談できる機関と連携する必要があると思う。
- 教育現場においても介護の話題がよく取り上げられるようになればヤングケアラーや利用できるサービスの認知度が上がるのではと思います。
- 授業(道徳、総合学習など)で福祉について学ぶ。
- ヤングケアラーの実態を、教師が把握することが必要で、ケアしている子供は隠したがる傾向にもあると思うので、経済的、肉体的負担等にあっても、ケアしている本人が、教師に相談でき、教師も、スマイルや相談支援員の存在を理解して、福祉につながる役目をするように、教育委員会に申し入れをしてほしい。まずは教員の教育からではないかと思えます。

### ● 学校と地域との開かれた関係づくり

- 小学校、中学校、高等学校が地域社会との交流があり、地域に開かれていることが必要。
- この問題だけでなく、教育現場の特殊性が問題。もっと地域に開かれて、体系的な動きをする必要がある。

### ● 福祉と教育現場との情報共有の仕組みづくり

- 教師と在宅の情報連携が重要。
- 学校で把握している問題と福祉現場での状況が共有されていない。共有される場がない。連携窓口がないように感じるので、このような事ができるシステムがあると良いと思う。
- 地域における学校と福祉の関係者が連携を図れる機会を作り、実態からサポートできる方法などを考え学んでおくことも方法だと思えます。
- 教育機関(学校)と障害福祉関係事業所等が、ヤングケアラーを含めた世帯構成や特性、気づきのきっかけについて情報交換できる場を持つ事が望ましいと感じます。
- 学校に福祉機関が連絡しやすい体制を整備する。共に行う研修の機会を増やす。
- 教育現場で察知したことを、上位機関への付度等なしに、福祉相談機関と協議できるような仕組みを作ること。
- スクールソーシャルワーカー等と相談支援事業所の連携。
- 共通の事例検討会の開催など。
- 学校でヤングケアラーについて学ぶ時間を持ち、講師として福祉職員を派遣する。
- お互いに気軽に繋がれるツールがあると良いと思います。お互いに忙しいので…。
- 認知症サポーター養成講座をケア24が小学校で行っているが、この中で、ヤングケアラーの話をする事ができると考えます。学校のご都合で講座開催ができないことも少なくないので、定例化することを今一度確認する必要があると思えます。
- 学校(教育機関・公立・私立含め)・保健センター及び障害福祉・高齢福祉・福祉事務所・生活困窮者自立支援法に基づく窓口との連携にて、複数課題を持つ家庭において世帯構成状況

に応じた関係機関での情報共有や支援検討の場をつくる。

- 学校に情報共有できる仕組み作りが必要だと思います。

#### ● 学校から適切な相談機関等へのつなぎ

- 学校等で気になる児童がいた場合、卒業より余裕をもった時期に福祉に情報共有する。
- 学校は家族機能にまでは介入しない面があるので、福祉的な視点での家族の困りごとへの支援が大切。申請主義的な視点では、おそらく難しいところをどうするか。
- 学校の先生などが状況を把握した場合に適切な機関への相談に繋げられるように、相談先の周知や定期的な話し合いの場を作っていく。顔の見える関係、連携を深めていくことで、早期発見、支援に結びつけていけるのではないかと思います。
- スクールソーシャルワーカーを学校に常勤で配置して、家庭環境の整備を早い段階から行う。また関係機関のネットワークづくりもする。
- ヤングケアラーと思わしき子どもを、教師などが発見した場合はその家庭に包括などが介入できるようになると良い。
- 学校に福祉関係者を招いて講演を行ったり、HRの時間に教師からそういった状況にある生徒がいたら、躊躇せず相談するよう呼び掛けまた、相談機関の資料を全員に配布するなど。
- 学校が児童・生徒の異変について感じた時に相談できる機関があると良いと思います。制度が分からず介護を必要とする人に支援者が入っていない場合は、教育機関が児童や生徒にもっとも近く、ヤングケアラーを気づきやすい環境にあると思います。

#### ● 福祉からの相談先の確保

- 最初から大きな介護力はいらなかったが、徐々に疾病で変化する親、祖父母などの家族をみて、心を痛めていることがあります。話を伺うだけにしかならないこともあり、どこに連絡してもサービスや相談につながらなかった悲しい思い、無力感がありました。ケアマネジャーも相談できる場所を作ってください。すぐに解決できなくても光がお互いに見えるようにしてください。
- 高齢者福祉に関しては教育機関との関わりが殆どない。学校側に児の家庭内での状態について相談や報告を行いたくても不審がられる等の為に接触が難しい。行政側でヤングケアラーに関与する関係機関全てでグループワークをする等、顔の見える関係づくりを推進してほしい。
- ヤングケアラーについて知識不足な為情報共有や勉強会があると良い。
- ヤングケアラーの存在を把握した場合に、その情報を共有して連携を図れる体制を作ることが必要。
- なかなかヤングケアについて学校側も知り得ないことが多いと思う。また、ケアマネや支援者も気づいても連携できずにいるケースもあるだろう。まず顔つなぎできる場が必要。こども食堂なども。

## ② もっと連携できるとよいと思う機関

- ・ヤングケアラーと思われる子どもに気づいたときに、もっと連携できるとよいと思う機関を上位5つまであげてもらった。全体では、「子ども家庭支援センター」(62.6%)、「SSW・SC(スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー)」(55.7%)、「区の要保護児童対策地域協議会」(40.5%)の順であった。
- ・次いで、「小中学校」(32.1%)、「児童相談所」(30.5%)、「区の障害福祉部門」(28.2%)、「区の高齢福祉部門」(24.4%)、「高等学校」(21.4%)、「民生・児童委員」(20.6%)、などがあげられた。
- ・「医療機関」、「他の障害福祉サービス事業所」、「他の子育て支援施設」等をはじめとする各種サービス機関についても、1割程度の回答がみられた。

### 【「その他」の自由回答】

- 高齢福祉従事者としては、高齢福祉部門以外の相談がどこになるのか、判断が出来ない。
- AIに相談し、連携機関をはじき出してもらおう。
- 各機関の特徴、役割がよくわからない。

### 【事業所種別】

- ・事業所種別に、全体の傾向と比べて特徴的な点(事業所全体に比べ、10ポイント以上、高いあるいは低い項目)は、以下のとおりである。

#### ◆スマイル&特定相談

##### (事業所全体に比べて高い項目)

区の障害福祉部門	(46.7%)
児童相談所	(43.3%)

#### ◆ケア24

##### (事業所全体に比べて高い項目)

子ども家庭支援センター	(78.6%)
-------------	---------

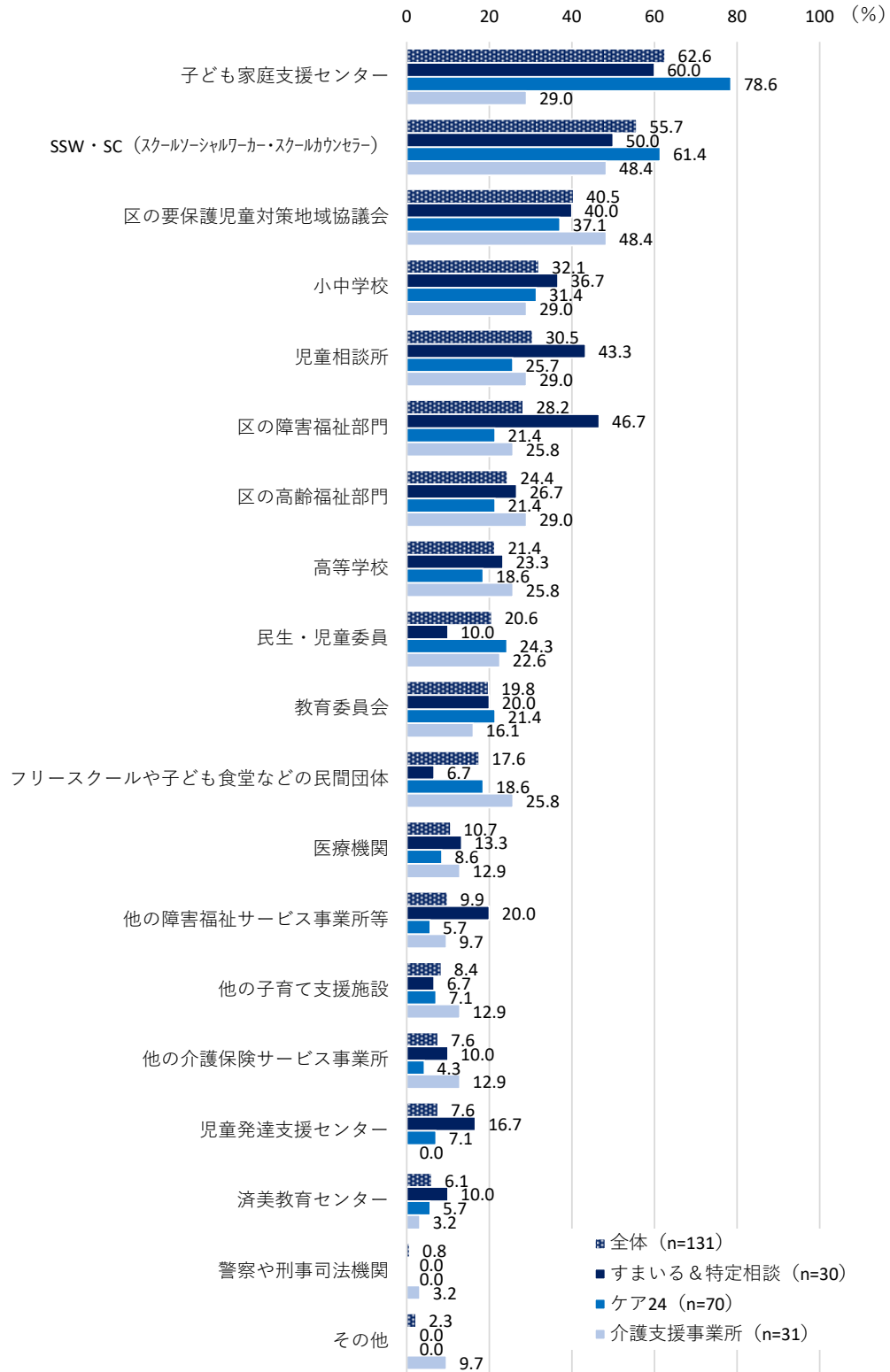
#### ◆介護支援事業所

##### (事業所全体に比べて低い項目)

子ども家庭支援センター	(29.0%)
-------------	---------



図表 3-4-3 もっと連携できるとよいと思う機関（上位5つまで）



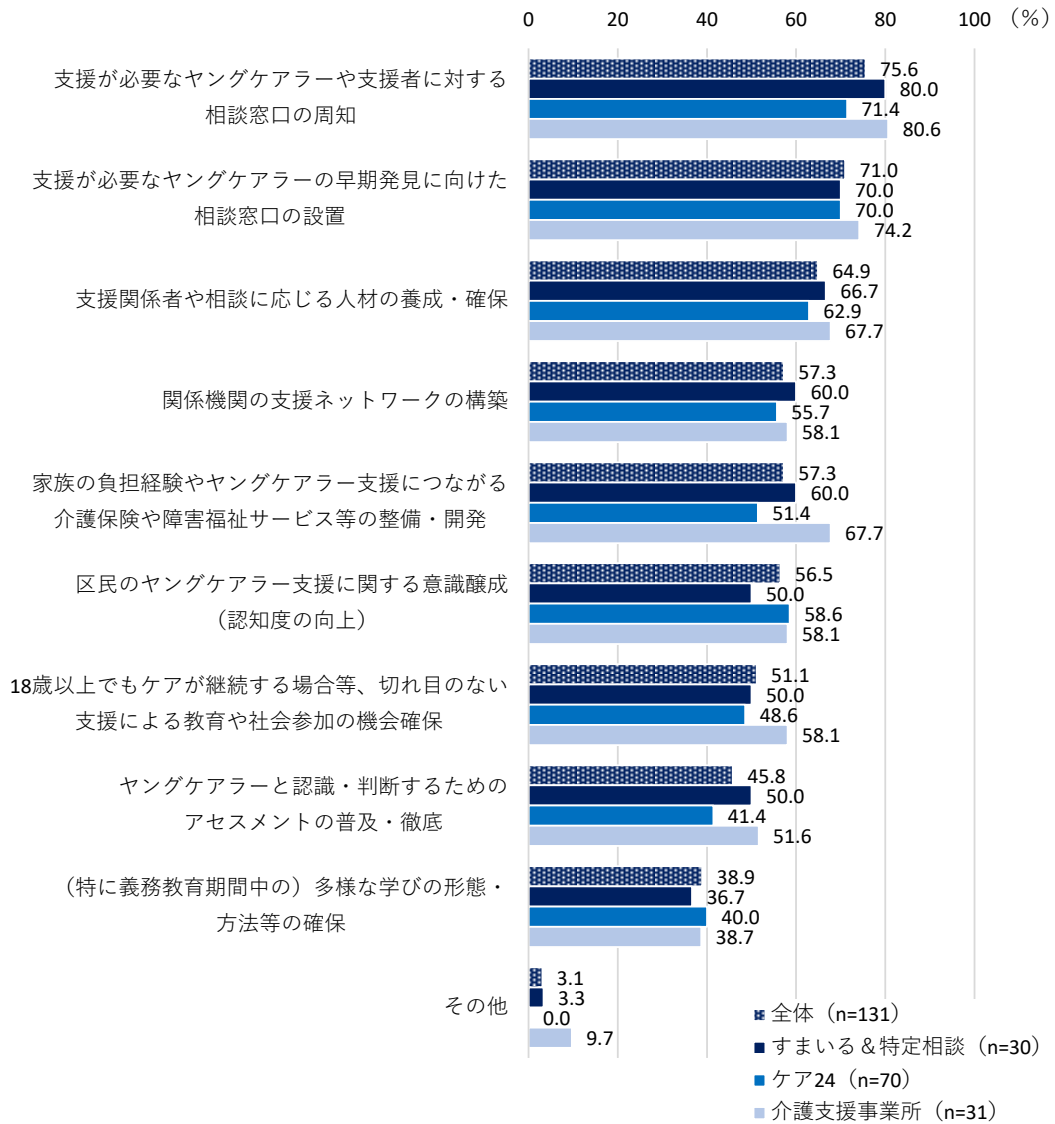
### ③ 杉並区に期待すること

- ・必要な支援を実現するために杉並区に期待することとして、複数回答で聞いた。
- ・全体で、上位3項目としてあげられたのは、相談・人材育成に関する項目で、6割超の回答率となった。具体的には「ヤングケアラーや支援者に対する相談窓口の周知」(75.6%)、「ヤングケアラーの早期発見に向けた相談窓口の設置」(71.0%)、「支援関係者や相談に応じる人材の養成・確保」(64.9%)である。
- ・次いで、関係機関のネットワークの構築、福祉サービスの整備・開発等の項目も過半数の回答者があげている。具体的には「関係機関の支援ネットワークの構築」(57.3%)、「家族の負担経験やヤングケアラー支援につながる介護保険や障害福祉サービス等の整備・開発」(57.3%)、「区民のヤングケアラー支援に関する意識醸成(認知度の向上)」(56.5%)、「18歳以上でもケアが継続する場合等、切れ目のない支援による教育や社会参加の機会確保」(51.1%)である。
- ・そのほか、「ヤングケアラーと認識・判断するためのアセスメントの普及・徹底」(45.8%)、「(特に義務教育期間中の)多様な学びの形態・方法等の確保」(38.9%)も4割前後の期待を得ている。
- ・事業所種別では、介護事業所の「家族の負担経験やヤングケアラー支援につながる介護保険や障害福祉サービス等の整備・開発」の回答率が他に比べて10ポイント程度高かったが、大きな傾向差はみられなかった。

#### 【「その他」の自由回答】

- 相談窓口はひとつに。例えば“居宅介護支援事業所”なら TEL〇〇-〇〇〇〇-〇〇〇〇へなど。
- ヤングケアラーに代わる生活支援の充実。
- できる限りの現状把握をして、現状を伝える。

図表 3-4-5 杉並区に期待すること（複数回答）





# 巻末資料 (調査票)

- 児童・生徒向けアンケート調査票  
(小学校 1～2 年生用、小学校 3 年生～中学生用)
- 学校向けアンケート調査票
- 高齢・障害関係の事業所向けアンケート調査票

## ふだんの せいかつや かぞくにかんする アンケート

◆まず せんせいから いわれた ばんごうを にゆうりよくしてください。

《わからなければ せんせいに きいてください。》

--	--	--

しつもん1 あなたは なんねんせいですか。(1つ えらぶ)

1. しょうがく1ねんせい
2. しょうがく2ねんせい

しつもん2 なつやすみのあいだで つぎのようなことが ありましたか。

(あてはまるもの すべてを えらぶ)

1. ならいごとを おやすみした
2. ともだちと あそぶじかんが なかった
3. じぶんの すきなことが できなかった
4. ゆっくり ねむることが できなかった
5. かぞくと たのしくすごす じかんが なかった
6. わからない
7. こたえたくない

しつもん3 あなたは ふだん したにあげている おせわをしていますか。

(おせわを しているひとが なんにんか いるときは あてはまるもの すべてをえらんでください)

1. かぞくの ごはんの よういや あとかたづけ、せんたく、そうじ、かいものなど
2. きょうだいの おせわや ほいくえんなどへの おくりむかえ
3. おふろや トイレ(といれ)の てつだい、ふくをきさせたり ぬがせたりすることなど
4. ごはんを たべさせてあげる、ものをもってあげる、たちあがるときなどの てつだい
5. かいものや さんぽなど あるくときの てつだい
6. びょういんへ いっしょに ついていく
7. かぞくの はなしをきいてあげる、げんきづける、そのひとの そばにいてあげるなど
8. あぶないことが ないよう、いつもかぞくを みていたり、こえをかけるなど
9. にほんごが わからない かぞくに、かぞくが わかることばに かえたり、かかれていることをつたえる
10. かていの おかねが いくらあるのかをして、そのおかねの なかから しはらったりする
11. くすりを よういしたり、くすりを のんだか たしかめるなど
12. そのほか
13. わからない
14. こたえたくない
15. かぞくの おせわは していない



これでしつもんはおわりです。  
ありがとうございました。

うえの1～12の どれかを えらんだひとは つぎの しつもん4にも こたえてください

しつもん4 あなたは だれの おせわを していますか。(あてはまるものすべてをえらぶ)

1. おとうさん
2. おかあさん
3. おじいさん
4. おばあさん
5. きょうだい
6. そのほか
7. わからない
8. こたえたくない

～ これで しつもんは おわりです。ありがとう ございました。～

## ふだんの生活や家族(かぞく)に関するアンケート①

◆まず、先生から言われた番号(ばんごう)を入力してください。

《わからなければ先生に聞いてください。》

--	--	--

問1 あなたの学年を教えてください。(1つえらぶ)

1. 小学3年生
2. 小学4年生
3. 小学5年生
4. 小学6年生
5. 中学1年生 (小中一貫校の7年生を含む)
6. 中学2年生 (小中一貫校の8年生を含む)
7. 中学3年生 (小中一貫校の9年生を含む)

問2 この4月から今日まで、つぎのようなことがありましたか。(あてはまるものすべてをえらぶ)

1. 学校を欠席(けっせき)した
2. 学校を遅刻(ちこく)した、または早たいした
3. つかれて学校に行きたくなくなった
4. 授業(じゅぎょう)中にいねむりをした
5. 宿題(しゅくだい)や課題(かだい)ができなかった、または終(お)わらなかった
6. わすれものをした
7. 学校には行ったが、ほとんど保健室(ほけんしつ)ですごした
8. 習(なら)いごとや部活動(ぶかつどう)を休んだ
9. 家族(かぞく)のことで自分の時間がとれなかった
10. 家族(かぞく)とすごす楽しい時間が少なかった
11. 友だちとあそんだり、話したりする時間が少なかった
12. わからない
13. 答えたくない

問3 家族(かぞく)の中に、あなたが、お世話(せわ)をしている人はいますか。(1つえらぶ)

1. いる → ご家庭などで、アンケート②に教えてください。
2. いない → これで質問(しつもん)はおわりです。ありがとうございました。

※「お世話(せわ)」とは、つぎのようなものです。

- 兄弟のお世話(せわ)や保育園(ほいくえん)などへの送(おく)り迎(むか)え
- ごはんを食(た)べさせてあげる、ものをとってあげる、立ち上がる時(とき)などの手伝(てつだ)い
- 買い物(かひ)や病院(びょういん)へ行く時(とき)など、歩きやすいようにする手伝(てつだ)い
- 家族(かぞく)の話(わ)を聞いてあげる、元(も)ちあげる、その人(ひと)のそば(そば)にいてあげる
- あぶないことがないよう、いつも家族(かぞく)を見ていたり、声(こゑ)をかけたりする
- くすりを用意(ようい)したり、くすりを飲(の)んだか確(た)しかめたりする など



## ふだんの生活や家族(かぞく)に関するアンケート②

問1 あなたの学年を教えてください。(1つえらぶ)

1. 小学3年生
2. 小学4年生
3. 小学5年生
4. 小学6年生
5. 中学1年生 (小中一貫校の7年生を含む)
6. 中学2年生 (小中一貫校の8年生を含む)
7. 中学3年生 (小中一貫校の9年生を含む)

問2 あなたが、いっしょに住(す)んでいるのはだれですか。(あてはまるものすべてをえらぶ)

1. お父さん
2. お母さん
3. おじいさん
4. おばあさん
5. その他(た)の保護者(ほごしゃ)
6. お兄さん → ( )人
7. お姉さん → ( )人
8. 弟 → ( )人
9. 妹 → ( )人
10. その他(た) ( )
11. わからない
12. 答えない

問3 あなたが、ふだんしている家族(かぞく)のお世話(せわ)は、どのようなことですか。

(お世話(せわ)をしている人が何人かいる場合には、あてはまるものすべてをえらんでください)

1. 家族(かぞく)のごはんの用意(ようい)や後かたづけ、洗濯(せんたく)、そうじ、買い物などの家事
2. きょうだいのお世話(せわ)や保育園(ほいくえん)などへの送(おく)りむかえ
3. おふろやトイレの手伝(てつだ)い、服(ふく)を着(き)たりぬいだりすることなど身(み)の回りの手伝(てつだ)い
4. 食事(しょくじ)をするさいの手伝(てつだ)いをしたり、物(もの)を取(と)ったり、立ち上がる時などの動(うご)きのサポート
5. 買い物やさんぽなど歩く時の手伝(てつだ)い
6. 病院(びょういん)へいっしょに行く
7. 話し相手(あいて)になる、元気づける、その人のそばにいるなど、気持(きも)ちのサポート
8. 目がはなせない家族(かぞく)のそばにいて気を配(くば)ったり、声かけするなどの気づかい
9. 日本語の通訳(つうやく)、手紙や書類(しょるい)に書かれていることなどの説明(せつめい)
10. 家庭(かてい)のお金の管理(かんり)
11. 薬(くすり)を用意(ようい)したり、薬(くすり)を飲(の)んだかたしかめるなど薬(くすり)の管理(かんり)
12. その他(た)
13. わからない
14. 答えたくない

問4 あなたが、お世話(せわ)をしている家族(かぞく)はどなたですか。

(あてはまるものすべてをえらぶ)

- |          |           |
|----------|-----------|
| 1. お父さん  | 5. きょうだい  |
| 2. お母さん  | 6. その他(た) |
| 3. おじいさん | 7. わからない  |
| 4. おばあさん | 8. 答えたくない |

問5 家族(かぞく)へのお世話(せわ)は一人でしていますか。それとも、だれかといっしょにしていますか。(もつともあてはまるものを1つえらぶ)

- |                        |                     |
|------------------------|---------------------|
| 1. いつも一人でしている          | 4. だれかといっしょにすることが多い |
| 2. ほとんど一人でしている         | 5. わからない            |
| 3. 半分くらいはだれかといっしょにしている | 6. 答えたくない           |

問6 あなたは、どのくらいお世話(せわ)をしていると感(かん)じますか。(1つえらぶ)

- |           |           |
|-----------|-----------|
| 1. ほぼ毎日   | 4. もっと少ない |
| 2. 週に3~5日 | 5. わからない  |
| 3. 週に1~2日 | 6. 答えたくない |

問7 あなたは、平日(学校がある日)と休日(学校がない日)に、それぞれ何時間くらいお世話(せわ)をしていますか。日によってちがう場合は、この1ヶ月でいちばん長かった日の時間を教えてください。

1. わかる
- 平日(学校がある日):1日( )時間くらい
- 休日(学校がない日):1日( )時間くらい
2. わからない 3. 答えたくない

問8 あなたは、だいたい何才くらいのころから、お世話(せわ)をしていますか。

1. わかる→( )才くらいのころから 2. わからない 3. 答えたくない

問9 家族(かぞく)のお世話(せわ)をすることで、つぎのようなことは、あなたにどのくらいあてはまりますか。(あてはまるものすべてをえらぶ)

- |                                 |                              |
|---------------------------------|------------------------------|
| 1. ねる時間がない                      | 10. 相談(そうだん)できる人がいない         |
| 2. ねむりづらい                       | 11. 自分だけがお世話(せわ)をすることをふまんに思う |
| 3. ねているときに何度(なんど)も目がさめる         | 12. 自分のことより家族(かぞく)の世話(せわ)をする |
| 4. 休む時間がない                      | 13. 自分がやらなければならないと思う         |
| 5. いつもつかれている                    | 14. その他(た)                   |
| 6. やる気が出ない                      | 15. とくにない                    |
| 7. いつも家族(かぞく)のことが心配(しんぱい)       | 16. わからない                    |
| 8. 家にいるとつらいと感(かん)じる             | 17. 答えたくない                   |
| 9. 自分の将来(しょうらい)に不安(ふあん)を感(かん)じる |                              |

問 10 あなたがお世話(せわ)をしている家族(かぞく)のことや、お世話(せわ)のなやみについて、だれかに相談(そうだん)したことはありますか。(あてはまるものすべてをえらぶ)

- |   |                              |
|---|------------------------------|
| 1. お父さん、お母さん                              | 10. 近じよの人                    |
| 2. おじいさん、おばあさん                            | 11. LINE など SNS 上の知り合い       |
| 3. きょうだい                                  | 12. ゲームなどインターネット上の知り合い       |
| 4. しんせき (おじ、おばなど)                         | 13. 自分と同じような経験 (けいけん) をしている人 |
| 5. 友だち                                    | 14. その他 (た)                  |
| 6. 学校の先生 (保健室 (ほけんしつ) の先生以外)              | 15. だれにも相談 (そうだん) したことがない    |
| 7. 保健室 (ほけんしつ) の先生                        | 16. わからない                    |
| 8. スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー               | 17. 答えたくない                   |
| 9. 病院 (びょういん) ・医療 (いりょう) ・福祉 (ふくし) サービスの人 |                              |

問 10 で「15. だれにも相談(そうだん)したことがない」と答えた人は、下の①と②に答えてください。

① 相談(そうだん)していない理由(りゆう)を教えてください。(あてはまるものすべてをえらぶ)

1. 相談 (そうだん) するほどのなやみではないから
2. だれに相談 (そうだん) するのがよいかわからないから
3. 相談 (そうだん) できる人がいないから
4. 家族 (かぞく) のことを話したくないから
5. 相談 (そうだん) しても何も変 (か) わらないから
6. その他 (た)
7. 理由 (りゆう) はとくにないが、相談 (そうだん) しようと思わなかった
8. わからない
9. 答えたくない

② あなたが、お世話(せわ)をしている家族(かぞく)のことや、お世話(せわ)のなやみを相談(そうだん)するとしたら、だれに相談(そうだん)しますか。(あてはまるものすべてをえらぶ)

- |   |                              |
|---|------------------------------|
| 1. お父さん、お母さん                              | 10. 近じよの人                    |
| 2. おじいさん、おばあさん                            | 11. LINE など SNS 上の知り合い       |
| 3. きょうだい                                  | 12. ゲームなどインターネット上の知り合い       |
| 4. しんせき (おじ、おばなど)                         | 13. 自分と同じような経験 (けいけん) をしている人 |
| 5. 友だち                                    | 14. その他 (た)                  |
| 6. 学校の先生 (保健室 (ほけんしつ) の先生以外)              | 15. だれにも相談 (そうだん) したくない      |
| 7. 保健室 (ほけんしつ) の先生                        | 16. わからない                    |
| 8. スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー               | 17. 答えたくない                   |
| 9. 病院 (びょういん) ・医療 (いりょう) ・福祉 (ふくし) サービスの人 |                              |

問 11 学校やまわりの大人にしてもらいたいことはありますか。(あてはまるものすべてをえらぶ)

1. 自分のことについて話を聞いてほしい
2. 自分や家族(かぞく)のことを理解(りかい)してほしい
3. 家族(かぞく)のお世話(せわ)について相談(そうだん)にのってほしい
4. なやみごとを聞いて、解決(かいけつ)してほしい
5. 家族(かぞく)の病気(びょうき)やしょうがい、お世話(せわ)のことなどについてわかりやすく説明(せつめい)してほしい
6. 自分がしているお世話(せわ)の一部(いちぶ)をだれかに代(か)わってほしい
7. 自分がしているお世話(せわ)のすべてをだれかに代(か)わってほしい
8. 自由につかえる時間がほしい
9. 勉強(べんきょう)を教(お)えてほしい
10. お金の面(めん)で支援(しえん)してほしい
11. その他(た)
12. とくにない
13. わからない
14. 答えたくない

「11. その他(た)」をえらんだ人は、その内容(ないよう)を具体的(ぐたいてき)に答(こ)えてください。

問 12 つぎの中で、あったらいいなと思うことはありますか。(あてはまるものすべてをえらぶ)

1. オンラインで相談(そうだん)できる窓口(まどぐち)
2. 直接(ちよくせつ)会(あ)って相談(そうだん)できる場所(ばしょ)
3. LINE など SNS で相談(そうだん)できる窓口(まどぐち)
4. 同じような経験(けいけん)をした人と話(わ)せる場所(ばしょ)
5. 安心(あんしん)していられる場所(ばしょ)
6. 進路(しんろ)の相談(そうだん)ができる場所(ばしょ)
7. わからない
8. 答えたくない

問 13 そのほか、家族(かぞく)のことやお世話(せわ)のなやみ、こうしてほしいと思うことや気(き)になることなどがあれば、自由(じゆう)に書(か)いてください。

～ これで質問(しつもん)はおわりです。ご協力(きょうりょく)ありがとうございました。～

小・中学校におけるヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査

I. 基本情報

問1 ご回答された方の役職を教えてください。(1つに○)

1. 校長
2. 副校長
3. 主幹
4. 主任教諭
5. 教諭
6. 養護教諭
7. その他 ( )

問2 学校名を教えてください。

学校名 :

問3 貴校の在籍者数を教えてください。

( ) 人 令和5年9月1日時点 (もしくはそれに最も近い時点)

II. 支援が必要だと思われる子どもへの対応についてお伺いします。

問4 下記の子どもについて校内で共有しているケースはありますか。(あてはまる番号すべてに○)

1. 学校を休みがちである
2. 遅刻や早退が多い
3. 保健室で過ごしていることが多い
4. 精神的な不安定さがある
5. 身だしなみが整っていない
6. 学力が低下している
7. 宿題や持ち物の忘れ物が多い
8. 保護者の承諾が必要な書類等の提出遅れや提出忘れが多い
9. 学校に必要なものを用意してもらえない
10. 修学旅行や宿泊行事等を欠席する
11. 校納金が遅れる、未払い
12. その他 ( )

問5 問4のケースについて、どのような体制で情報共有・対応の検討を行っていますか。最も多いケースでご回答ください。(1つに○)

1. 校内の検討体制で検討している →問6へ
2. 個別に対応している (決まった検討体制はない) →問7へ

問6 問5で「1. 校内の検討体制で検討している」と回答した方にお伺いします。校内ではどのような体制で情報共有・対応の検討を行っていますか。

(1)情報共有・対応の検討の方法等(あてはまる番号すべてに○)

1. スクリーニング会議 (※)
2. ケース会議
3. 生活指導部・委員会など
4. 児童生徒理解・支援シートなど共通様式による情報共有
5. 特別支援教育コーディネーターなど学校内・関係機関との連絡調整・会議開催の調整など 児童・生徒の抱える課題の解決に向けて調整役として活動する教職員の配置・指名
6. その他 ( )

※すべての子どもを対象として、問題の未然防止のために、データに基づいて、潜在的に支援の必要な子どもや家庭を適切な支援につなぐための迅速な識別を行う会議。

(2)(1)で「1. スクリーニング会議」「2. ケース会議」「3. 生活指導部・委員会など」、「6. その他」と回答した方にお伺いします。どの教職員が参加していますか。また、会議の頻度はどれくらいですか。(あてはまる欄に番号を記入)

	参加者	頻度
1. スクリーニング会議		
2. ケース会議		
3. 生活指導部・委員会など		
6. その他		

<参加者：選択肢>

1. 校長	7. 教育相談担当
2. 副校長	8. 特別支援教育コーディネーター
3. 学年主任	9. スクールカウンセラー (SC)
4. 学級担任	10. 外部の関係機関
5. 生活指導主任 ( )	
6. 養護教諭	11. その他 ( )

<頻度：選択肢>

1. 2週間に1回以上
2. 月に1回程度
3. 半年に1回程度
4. 年に1回程度

問7 問5で「2.個別に対応している(決まった検討体制はない)」と回答した方にお伺いします。

問4のケースについて、貴校ではどのような体制・方法で情報共有・対応の検討を行っていますか。関わる教職員、情報共有や検討の方法、頻度等について、具体的に教えてください。

--

問8 問4のケースについて、学校以外の関係機関と連携して、必要に応じて情報共有や対応の検討を行うための体制がありますか。それぞれのケースについて、お答えください。また、連携体制がある場合は、連携する関係機関を選択肢からお選びください。

	体制（1つに○）	関係機関（あてはまる数字を記入）
①要保護児童対策地域協議会の登録ケース	1. ある <input type="checkbox"/> 2. 特にない	▶
②それ以外のケース	1. ある <input type="checkbox"/> 2. 特にない	▶

<関係機関：選択肢>

1. 市区町村教育委員会	9. 地域包括支援センター
2. 市区町村の福祉部門（4を除く）	居宅介護支援事業所
3. 市区町村の保健部門	10. 障がい者相談支援事業所
4. 市区町村の要保護児童対策地域協議会の調整機関/虐待対応部門	11. 自立相談支援機関
5. 教育支援センター（適応指導教室）	12. 保健センター
6. フリースクール・子ども食堂などの民間団体・施設	13. 民生委員
7. ピアサポート	14. 病院
8. 児童相談所	15. 警察や刑事司法関係機関
	16. その他 ( )

### Ⅲ. ヤングケアラーについてお伺いします。

問9 貴校では、これまでに学校として「ヤングケアラー」の共通理解を深める場を設けたことがありますか。(1つに○)

1. 会議や研修等を通じて、学校として「ヤングケアラー」の共通理解を深める場を設けた
2. 学校として「ヤングケアラー」の共通理解を深める場を設けるなどの特別な対応はしていない

問10 貴校では、「ヤングケアラー」と思われる子どもの実態を把握していますか。(1つに○)

1. 把握している →問 11へ
2. 「ヤングケアラー」と思われる子どもはいるが、その実態は把握していない →問 12へ
3. 該当する子どもはいない(これまでもいなかった) →問 12へ

問11 問10で「1. 把握している」と回答した方にお伺いします。「ヤングケアラー」と思われる子どもをどのように把握していますか。(あてはまる番号すべてに○)

1. 児童生徒の変化に気づくためのチェックリストなどのツールを用いている
2. 特定のツールはないが、できるだけ「ヤングケアラー」の視点を持って検討・対応している
3. その他 ( )

問12 ヤングケアラーを把握していない方も含め、全員にお伺いします。下記のヤングケアラーの定義や状態像を踏まえて、以下の設問にお答えください。ヤングケアラーの定義を見て、現在、貴校にヤングケアラーと思われる(可能性も含めて)子どもはいますか。(1つに○)

1. いる →問 13へ
2. いない →問 15へ
3. わからない →問 14へ

### 「ヤングケアラー」とは

- 心や身体に不調をかかえている家族がいる場合もあります。こうした家族に対して、必要なケア(「お世話」、「介護」、「看病」、「気づかい」など)をしている人を、一般的に「ケアラー」と呼びます。
- 下の図のように、「ケアラー」の中でも、本来なら大人が担うと想定されている家事や家族のお世話などを日常的に行うことにより、子ども自身の権利や生活が守られていない(例えば、子ども自身がやりたいことができないなど)と思われる18才未満の子どものことを「ヤングケアラー」と呼びます(下の図にあてはまらないようなお世話をしている場合もあります)。



ご飯の用意や後かたづけ、洗濯、掃除、買い物など家事をしている。



小さいきょうだいのお世話や保育園などへの送り迎えをしている。



家族のお世話や、いつもそばにいて気を配っている。



家族のそばにいて気を配ったり、声かけなどの気づかいをしている。



家族がわかることばにかえたり、書かれていることを伝える。



仕事ができない家族の代わりに、はたらいしている。



お酒や薬、かけごとをやめられない家族の世話をしている。



治りにくい病気の家族のめんどうをみている。



ご飯をたばさせたり物をとったり、身の回りの世話をしている。



お風呂やトイレなど、からだを動かすときに手伝っている。

※子ども家庭庁の資料をもとに解説文を一部変更しました。







(5)(3)で「2. 外部の支援にはつないでいない(学校内で対応している)」と回答した方にお伺いします。外部の支援につながなかった理由を教えてください。また、どのように対応しているのか教えてください。

理由	
対処方法	

(6)ヤングケアラーの把握や支援にあたって工夫していること、気を付けていることはどのようなことですか。具体的にお答えください。

--

(7)ヤングケアラーの把握や支援にあたって難しいと感じることはどのようなことですか。具体的にお答えください。

--

(8)問4の選択肢は、児童生徒の変化に気づくためのチェック項目(案)ですが、追加すべき項目や分りにくい点があればお書きください。

ご意見	
変更項目案	
追加項目案	

<参考：問4の選択肢>

- |                    |                               |
|--------------------|-------------------------------|
| 1. 学校を休みがちである      | 7. 宿題や持ち物の忘れ物が多い              |
| 2. 遅刻や早退が多い        | 8. 保護者の承諾が必要な書類等の提出遅れや提出忘れが多い |
| 3. 保健室で過ごしていることが多い | 9. 学校に必要なものを用意してもらえない         |
| 4. 精神的な不安定さがある     | 10. 修学旅行や宿泊行事等を欠席する           |
| 5. 身だしなみが整っていない    | 11. 校納金が遅れる、未払い               |
| 6. 学力が低下している       |                               |

問14 問12で「3. わからない」と回答した方にお伺いします。その理由を教えてください。

(あてはまる番号すべてに○)

1. 学校において、「ヤングケアラー」の概念や支援対象としての認識が不足している
2. 不登校やいじめなどに比べ緊急度が高くないため、「ヤングケアラー」に関する実態の把握が後回しになる
3. 家族内のことで問題が表に出にくく、実態の把握が難しい
4. ヤングケアラーである子ども自身やその家族が「ヤングケアラー」という問題を認識していない
5. その他 ( )

問15 ヤングケアラーを支援するために、必要だと思うことはどのようなことですか。

(あてはまる番号すべてに○)

1. 子ども自身がヤングケアラーについて知ること
2. 教職員がヤングケアラーについて知ること
3. 学校にヤングケアラーが何人いるか把握すること
4. スクールカウンセラー (SC) やスクールソーシャルワーカー (SSW) などの専門職の配置が充実すること
5. 子どもが教員に相談しやすい関係をつくること
6. ヤングケアラーについて検討する組織を校内につくること
7. 学校にヤングケアラー本人や保護者が相談できる窓口があること
8. 学校がヤングケアラーの支援について相談できる機関があること
9. ヤングケアラーを支援する NPO などの団体が増えること
10. 福祉と教育の連携を進めること (具体的に )
11. その他 ( )
12. 特にない

問16 学校におけるヤングケアラーへの対応等に関してご自由に意見をお書きください。

～ 以上で質問はおわりです。ご協力ありがとうございました。 ～

## 杉並区 ヤングケアラー支援に向けたアンケート調査 (関係事業所等の支援機関向け)

杉並区障害者地域相談支援センターすまいる、特定相談支援事業所  
地域包括支援センター(ケア 24)、区内介護支援事業所向け調査票

### I 基本情報

#### 問1

(1)あなたが所属している事業所について、伺います。

① 事業所の種類 (1つに○)

1. 杉並区障害者地域相談支援センターすまいる
2. 特定相談支援事業所
3. 地域包括支援センター(ケア 24)
4. 区内介護支援事業所

② 事業所所在地 (1つに○)

1. 井草地域
2. 西荻地域
3. 荻窪地域
4. 阿佐ヶ谷地域
5. 高円寺地域
6. 高井戸地域
7. 方南・和泉地域

(2)あなたご自身のことについて伺います。

① 現在、事業所で自身が従事している仕事の内容 (主なもの1つに○)

1. 管理・総務
2. 相談・計画等策定
3. ケア、リハビリ等の直接サービス提供
4. その他( )

② 当該事業所での勤務年数 \_\_\_\_\_年

はじめに、以下東京都の資料を読んで質問に回答してください。

問2 あなたご自身の「ヤングケアラー」についての認識や関りについて伺います。

あなたは、「ヤングケアラー」について、どの程度認識していましたか。(1つに○)

1. 内容について認識しており、業務の中でも意識して対応している
2. 内容についてある程度認識しているが、業務の中では特に対応はできていない
3. 言葉だけは認識している
4. 言葉も認識していない（このアンケートでほぼ初めて知った）

東京都ヤングケアラー支援マニュアルより転載 令和5年3月

東京都福祉保健部少子社会対策部家庭支援課

## 1 本マニュアルにおける「ヤングケアラー」の捉え方

### (1) 「ヤングケアラー」とは

法令上の定義はありませんが、一般に、本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを日常的に行っている、下図のような18歳未満の子供とされています。しかしながら、18歳以上の若者ケアラーも切れ目のない支援が必要です。

[ 図表 2 ヤングケアラーが行っていることの例 ]

**ヤングケアラーとは** ヤングケアラーとは、例えばこんな子どもたちです

 <p>障がいや病気のある家族に代わり、買い物・料理・掃除・洗濯などの家事をしている</p>	 <p>家族に代わり、幼いきょうだいの世話をしている</p>	 <p>障がいや病気のあるきょうだいの世話や見守りをしている</p>	 <p>目を離せない家族の見守りや声かけなどの気づかいをしている</p>	 <p>日本語が第一言語でない家族や障がいのある家族のために通訳をしている</p>
 <p>家計を支えるために労働をして、障がいや病気のある家族を助けている</p>	 <p>アルコール・薬物・ギャンブル問題を抱える家族に対応している</p>	 <p>がん・難病・精神疾患など慢性的な病気の家族の看病をしている</p>	 <p>障がいや病気のある家族の身の回りの世話をしている</p>	 <p>障がいや病気のある家族の入浴やトイレの介助をしている</p>

出所:厚生労働省 (<https://www.mhlw.go.jp/young-carer/>)

上記は一例にすぎず、以下のようなケアをしている場合もヤングケアラーに含まれます。

- 精神疾患や知的障害、発達障害、疾病や難病等のある親やきょうだいのケアをしている
- 脳疾患、がんなどの病気のある親や祖父母のケアをしている
- 依存性のある親に対応する等、感情面のサポートをしている
- きょうだいの学童クラブ、保育所、放課後等デイサービス等の送り迎えをしている

見守りや、感情面のサポートもケアの一種です。「ヤングケアラーかどうかの厳密な判断」に捉われず、将来的に負担を抱えるかもしれない可能性等から、ヤングケアラーと思われる時点で見過ごすことなく話を聞いたり見守ったりしていくことが大切です。

## (2) 「ヤングケアラー」と関係の深い子供の権利

ヤングケアラーと思われる子供に気付くためには、上記のような様子のほか、教育を受ける権利、休み・遊ぶ権利、意見を表す権利、健康・医療への権利、社会保障を受ける権利、生活水準の確保等「子どもの権利条約」に定められた権利が侵害されている可能性がないかといった視点も重要です。

権利の侵害までには至らなくとも、兆候を感じた場合はその子供やケアしている家族の状況をよく確認し、子供の気持ちにも気を配りましょう。\*

【 図表 3 子どもの権利条約のうち、ヤングケアラーと関係の深い子どもの権利 】

 <p><b>第28条 教育を受ける権利</b>                  子どもは教育を受ける権利をもっています。国は、すべての子どもが小学校に行けるようにしなければなりません。さらに上の学校に進みたいときは、みんなにそのチャンスが与えられなければなりません。学校のきまりは、子どもの尊厳が守られるという考え方からはずれるものであってはなりません。</p>	 <p><b>第31条 休み、遊ぶ権利</b>                  子どもは、休んだり、遊んだり、文化芸術活動に参加したりする権利をもっています。</p>
 <p><b>第3条 子どもにもっともよいことを</b>                  子どもに関係のあることが決められ、行われるときは、子どもにもっともよいことは何かを第一に考えなければなりません。</p>	 <p><b>第6条 生きる権利・育つ権利</b>                  すべての子どもは、生きる権利・育つ権利をもっています。</p>
 <p><b>第12条 意見を表す権利</b>                  子どもは、自分に関係のあることについて自由に自分の意見を表す権利をもっています。その意見は、子どもの発達に応じて、じゅうぶん考慮されなければなりません。</p>	 <p><b>第13条 表現の自由</b>                  子どもは、自由な方法でいろいろな情報や考えを伝える権利、知る権利をもっています。</p>
 <p><b>第24条 健康・医療への権利</b>                  子どもは、健康でいられ、必要な医療や保健サービスを受ける権利をもっています。</p>	 <p><b>第26条 社会保障を受ける権利</b>                  子どもは、生活していくのにじゅうぶんなお金がないときは、国からお金の支給などを受ける権利をもっています。</p>
 <p><b>第27条 生活水準の確保</b>                  子どもは、心やからだですこやかに成長できるような生活を送る権利をもっています。親（保護者）はそのための第一の責任者ですが、必要なときは、食べるものや着るもの、住むところなどについて、国が手助けします。</p>	 <p><b>第32条 経済的搾取・有害な労働からの保護</b>                  子どもは、むりやり働かされたり、そのために教育を受けられなくなったり、心やからだによくない仕事をさせられたりしないように守られる権利をもっています。</p>
 <p><b>第36条 あらゆる搾取からの保護</b>                  国は、どんなかたちでも、子どもの幸せをうばって利益を得るようなことから子どもを守らなければなりません。</p>	

子どもの権利条約 抄訳・イラスト：公益財団法人日本ユニセフ協会

## Ⅱ 過去 1 年間におけるヤングケアラーと思われる子どもとのかかわり・支援の実績の有無と内容

問3 問2の定義を見たとうえで、あなたが、過去 1 年間に、相談や支援等で関わった家庭のなかで、ヤングケアラーと思われる(可能性も含む)子どもはいます(した)か。(1 つに○)

※当時の年齢が、18歳未満の方を対象とします。

- |                   |       |
|-------------------|-------|
| 1. いる (いた) →問4へ   | } 問5へ |
| 2. いない            |       |
| 3. わからない (判断できない) |       |

### 【ヤングケアラーと思われる子どもとのかかわりの実績がある方】

(問3で「1. いる(いた)」と答えた方に質問します)

問4 以下について、お答えください。

(1)あなたは、ヤングケアラーではないかと思われる子どもを、具体的にどのようにして判断しましたか。(あてはまるものすべてに○)

- |                                     |
|-------------------------------------|
| 1. 事業所の中でケース会議や検討を行って判断             |
| 2. 関係機関や関係団体からの報告・指摘で「ヤングケアラー」として対応 |
| 3. アセスメントシートやチェックリストなどのツールを用いて      |
| 4. その他 ( )                          |

➔ 該当すると思われる子どもの数は、合計何人います(した)か。

年齢層	人数
小学校低学年	人
小学校高学年	人
中学生	人
高校生	人
合計	計 人

(2)前問であげたヤングケアラーと思われる子どもに気づいたきっかけをお教えてください。(あてはまるものすべてに○)

- |                             |
|-----------------------------|
| 1. 子ども本人の話から                |
| 2. 近隣住民からの情報                |
| 3. 支援業務の中で家族・親戚などの話から気づいた   |
| 4. 行政や関係機関・関係者からの話で気づいた→SQへ |
| 5. その他 ( )                  |



SQ. 関係機関・関係者とは具体的にどこですか。 (あてはまるものすべてに○)

1. 区の要保護児童対策地域協議会	12. 児童発達支援センター
2. 区の障害福祉部門	13. 民生・児童委員
3. 区の高齢福祉部門	14. 子ども家庭支援センター
4. 他の障害福祉サービス事業所等	15. 児童相談所
5. 他の介護保険サービス事業所	16. 医療機関
6. 他の子育て支援施設	17. 警察
7. 教育委員会	18. 子ども食堂
8. 小学校	19. 保健センター
9. 中学校	20. 地域包括支援センター
10. SSW・SC (スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー)	21. その他
11. 済美教育センター	( )

(3) 子ども家庭支援センターや関係機関への連絡等について

ヤングケアラーと思われる(可能性のある)子どもに気づいたとき、あなたは、区の子ども家庭支援センターや関係機関とはどのような連絡の方法を取っていますか。(1つに○)

1. 気づいた時点で、すべてのケースについて、連絡・報告
2. 事業所内での検討ののち、ヤングケアラーの可能性が高い場合にのみ報告
3. 特にルール化していない(確認事項等あれば連絡)
4. その他 ( )

(4) 支援に当たり、他機関につないだケース、貴事業所内で対応したケース数をお教えてください。

他機関につないだケース \_\_\_\_\_人

貴事業所内で対応したケース \_\_\_\_\_人

※特に対応の必要がなかったケース \_\_\_\_\_人

【他機関につないだケースが1件以上あった方は(5)(6)にもご回答ください】

(5) 具体的には、どこにつなぎましたか。(あてはまるものすべてに○)

1. 区の要保護児童対策地域協議会	12. 児童発達支援センター
2. 区の障害福祉部門	13. 民生・児童委員
3. 区の高齢福祉部門	14. 子ども家庭支援センター
4. 他の障害福祉サービス事業所等	15. 児童相談所
5. 他の介護保険サービス事業所	16. 医療機関
6. 他の子育て支援施設	17. 警察
7. 教育委員会	18. 子ども食堂
8. 小学校	19. 地域包括支援センター
9. 中学校	20. 保健センター
10. SSW・SC (スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー)	21. その他 ( )
11. 済美教育センター	

(6)外部の機関等につないだ後のフォロー状況について伺います。 (1つに○)

1. 原則すべてのケースについて引き続き情報を共有している
2. 原則一旦つないで、その後は情報共有を図っていない
3. ケースの内容によって、まちまち

【(4)で「他機関につないだケース」が0件だったと回答した方は(7)にご回答ください】

(7)他機関につながなかった理由についてお教えてください。(あてはまるものすべてに○)

1. 自機関で対応可能だった(つなぐ必要がなかった)
2. どこにつなぐのが適切かわからなかった
3. その他( )

### Ⅲ 今後のヤングケアラー支援に向けて

**【全員の方】** 今後のヤングケアラー支援充実に向けて、以下の質問にお答えください。

問5 ヤングケアラーについて、相談につながりにくい理由あるとすれば、どのようなことだと思いますか。(あてはまるもの上位3つまでに○)

1. 子ども本人が、家族がケアをすることが当たり前だと思っている
2. ケアを必要としている人が、家族の世話を当たり前と思っている
3. 家族で支えられると思っている(サービスの利用は必要ない、という認識)
4. ケアを必要としている人がサービスの利用を希望しないことが多い
5. 子ども本人が、相談した結果、皆に知られることを不安に感じている
6. どこに相談したらいいかわからない
7. その他( )
8. 特になし(相談につながりにくいとは思わない)

問6 ヤングケアラーの早期発見や支援のために、今後より必要だと思うことはどのようなことですか。(あてはまるものすべてに○)

1. 事業所がヤングケアラーについて知ること
2. 事業所がヤングケアラーの支援について相談できる機関があること
3. 福祉と教育の連携を進めること(具体的に )
4. 支援マニュアルを作成し、それに基づき関係機関間で支援を行うこと
5. 子ども自身がヤングケアラーについて知ること
6. ヤングケアラー本人が相談できる多様な窓口があること(オンライン、直接会って相談、SNS等)
7. ヤングケアラーが周囲に相談しやすい関係をつくること
8. ヤングケアラーが他のヤングケアラーと交流する機会があること
9. ヤングケアラーのケアの負担が減るように家事支援や生活支援を充実させること
10. ヤングケアラーの学習機会が確保できるよう、多様な学びの場や方法を確保すること
11. SSW(スクールソーシャルワーカー)やSC(スクールカウンセラー)などの専門職の配置が充実すること
12. ヤングケアラーについて検討する組織を区につくること
13. 社会全体でヤングケアラーの認知度を高めること
14. ヤングケアラーを支援するNPOなどの団体が増えること
15. その他( )
16. 特になし

問7 ヤングケアラーと思われる子どもに気づいたときに、もっと連携できるとよいと思う機関として、どのようなところがありますか。 (あてはまるもの上位5つまでに○)

- |                                       |                         |
|---------------------------------------|-------------------------|
| 1. 区の要保護児童対策地域協議会                     | 11. 済美教育センター            |
| 2. 区の障害福祉部門                           | 12. 児童発達支援センター          |
| 3. 区の高齢福祉部門                           | 13. 民生・児童委員             |
| 4. 他の障害福祉サービス事業所等                     | 14. 子ども家庭支援センター         |
| 5. 他の介護保険サービス事業所                      | 15. 児童相談所               |
| 6. 他の子育て支援施設                          | 16. 医療機関                |
| 7. 教育委員会                              | 17. 警察や刑事司法機関           |
| 8. 小中学校                               | 18. プリスクールや子ども食堂などの民間団体 |
| 9. 高等学校                               | 19. その他                 |
| 10. SSW・SC (スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー) | ( )                     |

問8 必要な支援を実現するために杉並区に期待すること (あてはまるものすべてに○)

- |   |
|---|
| 1. 区民のヤングケアラー支援に関する意識醸成 (認知度の向上)              |
| 2. 支援が必要なヤングケアラーの早期発見に向けた相談窓口の設置              |
| 3. 支援が必要なヤングケアラーや支援者に対する相談窓口の周知               |
| 4. ヤングケアラーと認識・判断するためのアセスメントの普及・徹底             |
| 5. 支援関係者や相談に応じる人材の養成・確保                       |
| 6. 関係機関の支援ネットワークの構築                           |
| 7. (特に義務教育期間中の) 多様な学びの形態・方法等の確保               |
| 8. 家族の負担経験やヤングケアラー支援につながる介護保険や障害福祉サービス等の整備・開発 |
| 9. 18歳以上でもケアが継続する場合等、切れ目のない支援による教育や社会参加の機会確保  |
| 10. その他 ( )                                   |

～以上で質問はおわりです。ご協力ありがとうございました。～

●東京都では、令和5年3月に「東京都ヤングケアラー支援マニュアル」(東京都福祉保健部少子社会対策部家庭支援課)を作成し、ヤングケアラー支援の検討・計画作成にあたっての様式等を公表しています。

<https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/press/2023/03/27/47.html>

「ヤングケアラー」に関する実態調査  
－アンケート調査結果報告書－

令和5年 12月発行

登録印刷物番号
---------

05-0104
---------

編集・発行：杉並区 子ども家庭部 子ども家庭支援課  
(杉並子ども家庭支援センター)

〒166-0004 東京都杉並区阿佐谷南 1-14-8 TEL：03-5929-1902

杉並区のホームページでご覧になれます。<https://www.city.suginami.tokyo.jp>